

川柳塔

昭和十五年八月十五日印刷
昭和十五年九月一日發行（毎月一日發行）
創刊大正十三年 通卷六四〇号



日川協加盟

No. 640

九月号

つめたさに、おいしさをそえて.....

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪各店)
京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店



大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

有り難う

6月22日、日川協の第五回全日本川柳大会が岡山市で開催された。これまで東京・京都・大阪・横浜だったのが、本年は地方都市ではじめての岡山市で開かれたことは、いろいろな意味で各方面から注目の的であった。それだけに大森風来子実行委員長はじめ関係吟社のご心労ご努力は格別なもので、かずかずの好前例、記録を残して大盛況裡に終った。前々から、特別な期待と楽しみをもって、その日の来るのを待ちかねていた。それなのに

何としたことか、梅雨期の不順にわざされて宿痾の坐骨神経痛悪化という不測な出来ごとのために出席を断念せざるを得なくなった。しかえすがえすも無念残念の極みであった。しかし前日まで氣遣われた雨が当日すばらしい快晴となったことはせめてものお申しわけが立つ気がして、遠く大会場を想像しながら床に就いて居た。これ全くお世話人皆様の至誠が天に通じたものと感謝にたえない。岡山さん有難う。

横車ではない直情炎えさかり
硬骨漢涙もろさと岐路に立ち
耳鳴りに聞きたくもない老の愚痴
売名はあの人の癖さふりむかず
贈りものちらり本心見えかくれ

中島生々庵

川柳塔九月号

座右の句

命まで賭けた女でこれかいな

(梅里)

私の句

天国へ行くにも関所が多すぎる

狭間 希久志

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

有り難う

ある日記

俳風柳多留廿五篇研究

(三一丁)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・故岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

水煙抄

川柳の呼称について (川柳太平記 ㊂)

秀句鑑賞

(同人吟)
(水煙抄)

愛染帖

母親と母の句

十日のあやめ

中島生々庵 (1)
西尾 栞 (2)

中島生々庵選 (4)

菊沢小松園選 (32)

東野 大八 (23)

水粉千翁 (41)

小島 蘭幸 (45)

橘高薫風選 (42)

若本多久志 (28)

菊沢小松園 (25)

ある日記

西尾 栞

今年も、柳翁忌が廻ってきた。丁度二〇一回忌である。

七月七日は路郎忌、八月六日は水府忌、九月二十三日は川柳忌、と不思議と連続して修されるのも何かの因縁のようである。

今年の路郎忌は番傘本社から、吟一さん、いさむさん外沢山な方々が出席して下さって意義深い路郎忌を修することが出来た。

それにつけても思い出されるのは、路郎先生の還暦祝賀川柳大会が、昭和二十三年七月十一日に戎橋南東角のオメガハウスで開催された時のことである。そして私の頭の中に、三十二年前と思われる程、鮮やかに浮んでくる。その日の祝辞のトップは番傘の主幹水府先生であった。そして一冊の日記を持って登壇された。一場の祝辞を述べられたあと、

『今日は、私の川柳入門当時の日記を読む。』

明治四十四年、私が二十歳で路郎君は二十四歳の時の日記で、路郎君と私につながる縁というだけでなく、柳壇の上からみても面白い話だと思ふ。この日誌は明治四十四年三月から書き出している。そして八月十五日に路郎君が東京に出発する日、大阪駅へ私は見送りに行った、が逢えなかった。と書いてある。翌日青明氏の話から確かに路郎君は大阪駅を発ったことを知った。もし路郎君が、あの日

55年度二賞中間発表表……………(30)

同人名簿・その後の変更分……………(40)

一分間の柳論……………(46)

雅号ぶっちゃけばなし……………(47)

初歩教室……………(50)

大萬川柳「習慣」……………(52)

柳界展望……………(54)

本社八月句会……………(56)

各地柳壇(佳句地10選)……………(61)

「空」……………(48)

一路集「予定表」……………(48)

「肩すかし」……………(49)

編集後記……………(67)

(一三夫・葉子)……………(67)

(庸佑・整理)……………(56)

嘉数千代香選……………(61)

梅本登美也選……………(48)

林野魁光選……………(48)

奥谷弘朗選……………(49)

江口度……………(46)

垂井千寿子……………(47)

本田恵二朗……………(50)

川村好郎選……………(52)

座右の句

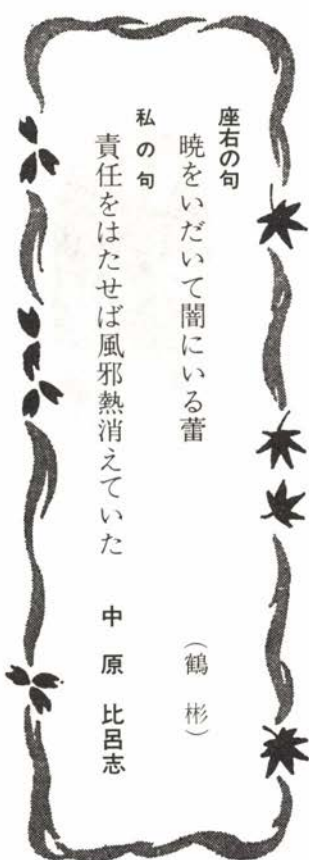
暁をいだいて闇にいる薔

私の句

責任をはたせば風邪熱消えていた

(鶴 彬)

中原 比呂志



私が見送らなかつたと怒つても、この通り日記が証拠で私は確かに駅に行った。裁判所でも日記は何よりの有力な証拠物件として認めていましてからと言われて会場をドツと笑わされた。そして日誌を繰って、四月の月などは十七回も互に往つたり来たりして、徹夜で作句し、喋り、更科でそばを喰ひ、吉兆で飲み、悪酔いをしたりしながらも川柳を作り雑誌の計画を立てたりしていたと話された。

そして大会後のテーブルスピーチの時に私は、今でこそ番傘と川柳雑誌はライバルとして世間で噂されているが、若かりし日の両巨頭の逢う瀬は、月に十七回という二日に二回会う日もあったことになりましたが、私等恋人同士でもそんなに逢つていません、全く羨ましい限りですなアと話したことを思い出します。

当日は頼原退蔵氏の講演を予定されていたが病気の為欠席されて氏の挨拶を香林氏が代読された、そして福田山雨楼氏の祝辞の代読を私がした。

因みに会場の東の壁に、富士野鞍馬氏の祝吟、『還暦はまだこれからの卓たたく』の軸が鮮やかな達筆で書かれて、路郎先生の心境を詠っていた。

その日の路郎先生の還暦の軸吟は、かの有名な

『六十一まだ情熱は燃えに燃え』であつた。

来る八月六日は水府忌である。明治四十四年の両先生を思い出して、塔社からも一人でも多く参加させてもらつ決心である。

(七月二十五日天神祭の夜、記す)



中島生々庵選

堺市 高橋 千万子

女ひとり自炊の水の細い音

待ち切れず両方動いた待ち合わせ

浴衣きて舞台のような下駄の音

道楽の極み釣人濡れにぬれ

ひび入った土鈴終った恋の音

倉敷市 水粉 千翁

奔れない寛の水の音となり

腕を組むこと多きかな明日へ向く

くつろぎを妻の白髪に問うてみる

明日を履く靴を揃えて脱ぎました

お手上げをしたと財布の底が言い

高槻市 若柳 潮花

一生を約束されていた出合い

飲めぬからコップ一杯注いで置く

Uターンしても行きつく場所が無い

三人の傘が触れあう京の雨

東林寺にて

沙羅双樹苔はみどりに雨ふくむ

尼崎市 黒川 紫香

打ち解けて来ると通訳邪魔になり

老人の控え目ひそと恋を抱く

左遷地へ仇名の方がもう届き

坂降りるつらさが判る歳になり

妙心寺にて

沙羅木の花落つ深夜雨を聞く

青森市 工藤 甲吉

知恵袋だてには齢をとってはず

それほどのことでもないに四面楚歌

借金のかたに鱗をみなはがれ

サラ金で借りて銀行から盗み

生きている人形だから手に余り

岡山市 川端 柳子

おたがいには好感 えしゃくのすれちがい
よく飲めてよく寝る夫に一寸嫉け

てっぺんの息切れにある山の幸

人形にがまんの限界問うてみる

つき足した言葉がきこちなく泌みる

倉敷市 稲田 豊作

緊張が過ぎると吃る子よ愛し

無念さよ汗が物価に追いつけぬ

口癖に明治は勿体ないを言い

老婆心若いプランに水を差す

雑魚の会少し大きいのがボスを真似

宝塚市 傍島 静馬

どたん場の俺にはほんとの俺を見る

難病へ友情あえて嘘を云う

出合頭にゆずる一步にあるマナー

久しぶりの蚊張に故郷の香がにじむ

大したことはないとは大ぶん儲けてる

倉敷市 小幡 里風

その手順くどくど聞いて梅漬ける

砂糖壺の中で参った蟻二匹

ある不貞紫陽花そんな彩で咲き

乱暴に口を叩いて負けている

米子市 小西 雄々

読みとれぬから達筆にしておこう

金策の応接室で浅く掛け

食い逃げをされては困るプレゼント

傷口を広げる株が下げ続き

高金利時代も貸し方にはなれず

和歌山市 津田 与史

限界の枠を守って跳んでいる

一と握りの土に根下ろす草の性

確信を持ってぬ手術とあとで聞き

もの蔭で咲いて雑草平和です

生き伸びた二年目の脈たしかめる

(前月分) 豊中市 増田 次章

退職の花道拍手俺がする

出世した友きこちない挨拶し

悲しみはさよなら声に出してから

マル秘メモまずいところで顔を出し

窓ぎわで昔の手柄花が咲き

神戸市 仲 どんたく

はからずも病弱古稀のテープ切る

墓標まで何を急ぐぞ老い雀

院長は鍼灸院へ行っはり

丑三つに帰る息子に我が縮図

西宮市 島居 白宗

数え齡云うて老化を誇張する

他人から見れば持つてゐるように見える
手抜きせぬだけの仕上げに目を瞑る
引越しへ利休ぬすみと云えぬ雨
海はもう真夏の出人梅雨晴間

倉敷市

野田素身郎

再就職汗をいとうてはおれぬ
いつからか半歩先行く妻となる
定年延長まだ働かねばならんのか
本のとおり作つた味になじめない
あの日からヘルスメーターには乗らず

大阪市

津守柳伸

チャンネルを全部覚えた雨三日
実れない運命を知るカイワリ菜
船で見てバスで通つた関門橋
雨傘が無駄で終つた梅雨の旅
見送りをパントマイムにする空港

今治市

長野文庫

夢のまた夢公約は絵そらごと
今月も王手王手のローン来る
賭けに勝ちそれから落ち込む蟻地獄
盃を持つてつながりつけに来る
今日からをスタートにする負けた弁

羽曳野市

塩満敏

キッチン妻の指揮下に模様替え
電卓で恋の掛け算してみたい

故郷の味もあります百貨店
校長も署長もおつた同窓会
金星の汗はマイクにのまれそう

岡山県

嘉数千代香

倅せなくらしの愚痴を聞いてあげ
意地張つてみてもおんなの目でみられ
神さまが味方と信じている強気
ひっそりと咲き野の花として悔いず
平和かなカレーライスの匂う宵

大阪市

金井文秋

エネルギー日本の明日はまだ暗い
貧乏と思う心が貧しくて
きたんなく云えば毒舌めいてくる
指名されあたりさわりのない意見
儲からぬ事を物好きまたはじめ

島根県

榊原秀子

便り待つことに慣れて夏は逝き
ものさしを自分の尺度で人にあて
花菖蒲期待へ二分咲き三分咲き
七夕の逢瀬気づかう雨が降る
墓詣りうながす夜明けの亡母の夢

大阪市

神夏磯道子

切れかけた糸つながった結び玉
過ぎ去れば涙の重みなど忘れ
野仏を素通り出来ぬ悩みもち

セールのお世辞本気になってくる
やりくりを母の家計簿から拾う

八尾市

高橋夕花

伏せたまま昨日のページが胸にある
雨しとど心ぬらさぬ石仏

かなしみの数だけちがうあね妹

三面鏡ひらくと女のかぞえ唄

ライバルに譲ったあとの晴天か

京都市

都倉求芽

土堤の影すらあつと二人ずつ二人ずつ
へそくりは結局子のももの妻のもの

鏡の中に今も昔を住まわせる

本物が咲いても造花逃げもせず

嵐の中でも水平線の見える人

奈良県

上田翠光

総裁が誰になろうと孫と居る
生甲斐は孫の寝息が膝にある

億という金に無縁の牛を飼う

豊あし原瑞穂の国の休耕地

もどかしゅうても鎌鍬の放されず

和泉市

西岡洛醉

繰り返す日々蟻となり糧運ぶ
生命線今日一ミりを伸ばし生く

踏み出した一歩へ大地生きる音

三面鏡右から左から老い迫る

雨続く働き蜂の顔曇る

京都府

間嶋青丹子

盗まれて知った時計の持つ重さ
打水のしずくが浴衣の裾にふれ

老人同士同じ挨拶くり返し

居眠りも年季の入っている社長

洋間でも何とか軸をかけたがり

悼 娛句楽さん一句

藤井寺市

児島与呂志

蜘蛛の糸かも知れない別れ際

病妻を庇う心のいじらしく

初夏と云うプール開きを梅雨が降る

爪を噛む女に翳りがつきまとい

銀婚の夫婦にボロボロある秘密

明日ありと頼む隙間へ風邪を引き

大阪府

本多柳志

体調を占う体操五分間

朝刊はどうでも折込から拡げ

知りすぎて知らなすぎて棄権する

国賓へ集る鹿はひもじかる

玉野市

小谷仙山

わからない事ばかりの老いの坂
きょうりもむ明日の天気にかかわらず

歯車の助け合いつつきしむ音

想い出に成るやも知れぬ旅の恥

日進月歩猫に昼寝のくせが有り

島根県

堀江正朗

見えていた頃の歩巾のまま老いぬ
意地張って生きる迷惑かも知れぬ
喜べば喜ぶ妻と縋りあい

追憶の輪の中にある鯛の色
差し向いときには苦いお茶も飲み

大阪府

河井庸佑

入れ知恵をされてるらしい電話口
会議室出たが納得まだいかず

集団にきらりと光る個を見つけ
伯楽に会えぬ不運とうぬぼれる

どことなく違々と杜長びんとくる

大阪府

小出智子

健やかな家族で朝を順に出る
子育ても終えて静かな宵祭

もつと大事なことを忘れているダイヤ
一緒には死ねない夫婦茶碗かな

エプロンを掛けると父の絵にならぬ

島根県

堀江芳子

優しさを見せて別れが辛くなる

幾人の味方がいてもひとり旅

けんめいに咲く紫陽花と見てくれず

弱音など吐いたら笑う流れ雲

海鳴りの激しさ欲しい日の無口

和歌山市 松原寿子

あなたは風私は毬で逢いに行く

針抱いた女の業にある慕情

につこりと驕りを赦す憎い人

距離おいて後からついてく愛もある

その絆あたためて置くコンパクト

八尾市

高杉鬼遊

犀星と故郷は同じ城下町

吉野家が駄目なら父も悔むまい

恐がりの夫と思うのは勝手

よりにより涸れた血を吸う莫迦な蚊よ

まだすこしいのちありけり油壺

富田林市

板尾岳人

山男足のうらまでよく洗い

もう少し背伸びさせたい金剛山

蛞蝓よ山の高さを御存知か

豆腐屋の水のルーツは滝である

友達に一樹一樹の名を習う

大阪市

大坂形水

オープン三菱銀行本店

赤軍も地震も考え建てた城

昔なら不敬皇居が見える窓

商売がら銀座を見ずに六本木

ドアを閉めベルの場所を知っておく

一人部屋なのにトイレで鍵をする

大阪市 不二田 一三夫

閑ま人が全員集合心齋橋

猿ほどの芝居も出来ず隅にいる

枝ぶりはよいけど縄が見つからず (わが編集寿命)

割り勘で父の葬式出すと決め

刑務所でやっとなりつく箸三度

八尾市 香川 酔々

蓮のうてなに頼杖をつく仏たち

片思いてるてる坊主濡れてます

地獄図絵お七の心炎えてます

方舟に乗って裸のおつきあい

桜井市 岩本 雀踊子

日めくりの一枚下にある未来

迷信を母からもらって母になる

千匹の蟻の稼ぎが列になる

神様に無理な約束してしまい

神戸市 中村 ゆきを

好きな色選るひとときの楽しさよ

カラオケまで出て法事はしやぎ過ぎ

あれこれと迷うて結局家で食べ

気づかれぬようにピエロがふく涙

和歌山市 垂井 千寿子

腹の虫殺され馴れた齢となり

父の日を輪禍の亡父に触れぬ子と

定年の空虚に負けぬ朝を組む

あじさいの彩の一色だけが好き

竹原市 小島 蘭幸

一日が始まる白い紙である

負けておく握り拳はポケットに

ギャンブルのこととん負ける面白さ

日曜大工妻の機嫌も直しとく

今治市 月原 宵明

訪ね来て梅雨をいたわり合う持病

打つ人の個性ホッチキスが曲む

農耕車停めて氏神さま拝む

次男南ア、ヨハネスブルグへ

地球儀の裏アフリカと言うところ

米子市 林 瑞枝

夜勤あけ子のおしやべりを唄と聞き

零落の美女色あせた花に似る

養殖魚海の野性が身につかず

茶道具展わがへそくりの多寡が知れ

和歌山市 野村 太茂津

夾竹桃咲けばふつと傷口疼く父

難民の痛み敗走の夜を偲ぶ

行雲流水僧の説教羨まし

マンネリへ仕掛火花を企てる

大阪市 河野 君子

何ことも信じようとす気の弱り

常識を少しはずしている魅力

白昼夢の中で風鈴そそと鳴る
親と子の空間にある夏休み

宇部市 平田実男

冷蔵庫衝動買いを持て余し
顔二つ持つてホステスよく稼ぎ
立前で賞める言葉がきこちない
祭日の国旗をいやな目で見られ

竹原市 山内静水

七色の声もつひとで近よれず
五月雨を肅々歩く国体旗
糸切歯決してあははと笑わない
何にくわぬ貌で止っていた時計

川西市 戸田古方

極楽のまま極楽へ行けそう
まかす気のガンであらうがなからうが
処置室に入れば病人らしうなり
梅雨明けを病人なればこそまたれ

倉吉市 奥谷弘朗

同伴で出たがる妻が愛しくて
執念の意欲に燃えた底力
紫を着てヒロインにある自信
老妻に着飾る欲がまだ残り

倉敷市 田垣方大

母親の心配母よりきれいな娘
気短かの箸納豆を諦める

頑なな病父素直になりあわて
戦争の時おじいちゃんにしていた

和歌山市 福本英子

螢火を追って無限を試される
もめている儘で旅立つ身ごしらえ
一泊へ日焼止めやら雨具やら
旅の船民話を一つもろてくる

大阪市 川口弘生

ひと言がゆるせぬ夫婦という他人
燃えた日の記憶私と共に生き
他人が皆達者に見える日の弱り
清張のひと時となり乗りますごし

鳥取市 河村日満

人知れずするジョギングの五時を起き
ひよろひよろの孫も一八〇センチ越す
旅先のつまずき不安抱え込み
お茶汲みをおんな女の役とせず

姫路市 植村客遊子

分の悪い所は白い杖で来る
年令の差を見せ付けられた針の穴
老二人揃の茶碗でお茶をたて
夕東風にホームシックをそえられる

大阪市 天正千梢

「本物の人生」ときざな事を言い
衿を正し通り一遍でお茶にごし

実のりのない議論理屈こねまわし
菊の鉢並べて余白埋めんとす

京都市 松川杜的

再就職十年

十年は短かし一つの事務机

案内図の坂道ですとは書いてない
一日一行そんな日記でつつがなし
クラシックの調べのように老夫婦

鳥取県 鈴木村諷子

俺だつて酒なと飲みたい時もあり
利用価値なしとみたのかよそよし

南九州観光

栄枯盛衰築山だけは残るなり
人工だ天然だ洗濯岩でもめている

泉佐野市 阿萬萬的

鯉向きを変えてそこだけ泥動く

唐招提寺ああさかななる落日よ

白紙委任されても自分は出し切れず
旧婚旅行妻はこまめによく動く

島根県 小砂白汀

髭面の医者でいささか気が減入り

頼られる方もぐらつきだしてきた

垂れ下がる蜘蛛へ手ごろな風が吹き
匕首のように別居をちらつかせ

大田市 藤田軒太楼

感覚の違い話がすれ違い

貯めたとの噂話題に巾が出来

鼻の差で負けた馬券の高うつき

無心に來たのにスリッパ揃えられ

松江市 小林孤呂二

丁寧な言葉お役所には珍しい

朋友相信ぜずポスト狙っている

耐えしのぶそこに男の顔がある

盃の丸さにこころの解けてくる

鳥取市 両川洋々

不発弾抱いて日記は白いまま

妻叛く時の仮面は別に持つ

老臭を消すジョギングの汗を拭く

謀反の矢ある日過保護の子がつかえ

岸和田市 高橋操子

亀さんに笑われそうな古稀祝う

七転八起タルマに負けません

一日一善ベケベケベケの日が続く

少うしはズボラになれと見舞書く

米子市 八木千代

道化師の涙本気と見てくれず

夕立が洗う地蔵の目鼻立ち

御家老の血すじを守る堀が朽ち

鳥取市 小林由多香

お隣りに負けない意地が無駄を買う
鯛の骨もらって犬にもいい日柄

菜の花へ公害知らぬわらべ唄

意地と意地からんで泥沼抜けられず

東大阪市

斎藤 三十四

寺参り坂は大師に手を引かれ

裸同志男は肚を割ってくる

一見に如かず評判程でない

ねぎらいは妻の笑顔だけでよい

大阪市

中川 滋雀

歩くよりほかなし信じる足がある

ローソクがまばたく先祖のお喋りか

なりゆきに委せて同じ舟にのり

真白い筆に驕りを試される

寢屋川市

宮尾 あいき

行きしふる心へ止め雨降ってくる

彩あせたあじさい雀もそっぽ向く

病院へ神詣のように身を浄め

手のひらのくぼみに神がおわします

倉敷市

藤井 春日

涙ふくうれしさ長生きしています

庇うより突き放す愛を母は持ち

そしるより自分の弱さを知りました

道しるべお前の好きな方へ行け

笠岡市

松本 忠三

表情も変えずに毎度ありがとう

しまいまで聞けと途中で怒りだし

女房と嫁ぐるになりお父さん

子宝へ男女の名前つけて待ち

大阪市

西森 花村

レコード屋梅雨の雨音聞くばかり

じよんがらの棹の角度や海の音

仏足石偏平足の気味があり

結婚をしてから覚えた孤独の日

兵庫県

遠山 可住

虫運ぶ蟻の進路をさまたげず

一人居る下宿の風呂に湯があふれ

問うたことだけに答えて老妓座し

握りかえす掌に中年をくすぐられ

大阪市

江城 修史

人恋し飲めぬ男のひとり言

三猿になれば路傍の石ですむ

老ゆる身よときめくものの日々薄れ

限りある命の限り夢を盛る

島根県

梅 みどり

若き日の夢なつかしい五十坂

あじさいの色みたされず雨が降る

鶴をおる千千の願いを繰り返す

花模様きせて手をひく夏祭

西宮市

藤村 女

公園でひとり石蹴る影がのび

一步先を行くライバルの肩の巾

独立の一步を父の墓に告げ

負け犬でよいと悟って口つむぐ

出雲市

原 独 仙

目に入れて痛くない孫嫁にゆく

梅雨明けりや治ると数医の言信じ

せつかちものんびり型もみなわが子

引越して来たザーマスに肩が凝る

仙台市

川 村 映 輝

ローカル線声の大きな女たち

鈍行の楽しさ変った駅に会い

宝くじ当った設計書いて見る

動いてる世界にポツンと坐ってる

神戸市

山 口 美 穂

友情の謎解けないままの二人です

つゆ草の小さな藍へ思うこと

ピエロの私ひとりの夜がさみしくて

揺れる心押さえたあひなくしやべり

岡山県

直 原 七 面 山

舵取りは妻任せ

呆けるも処生の術

請け判へ残る悔い

涸れて来た痴話喧嘩

松江市

恒 松 町 紅

真昼間の鈍行働かぬ客ばかり

鈍行で定退らしい夫婦旅

遊んでいます無職白々しい返事

小半日作句でつぶすのも無職

大阪市

柳 原 静 香

還暦へ二幕目の幕があく

六十路もうゆっくり廻る母のこま

人間の欲で空箱ふってみる

コップ酒女には惜しい飲みっぷり

呉市

横 田 英 詩

闘病の乳房よ子等が待っている

闘病の妻へ力になれぬ詫び

さみしさはあと半年の宮仕え

残念会雪辱を期す酒になり

竹原市

時 広 一 路

満ち潮をじつと見つめて湧く自信

算盤が頭の中で音をたて

隙間風握った拳弛み出す

草の実も小さな夢は持てそう

島根県

大 森 孝 華

便りこぬ日暮の日々に母が住み

雑草の無欲へ温かい日がそぐ

ひと口の水にみどりの風が鳴る

新薬の効を知らされ六十路坂

米子市

佐 伯 越 子

栗先生の句碑をたずねて

句碑たずね河内の旅はのどかなり
いにしへの太子の寺に句碑が映え
のど豆が見えるあくびに恋終り
家系の古さに沈黙深みゆく

鳥取市

有田とし江

ある時は亡夫とも想う雲愛し
野良猫よやせ衰えて子を育て
子ツバメのおねだり顔中口を開け
亡夫の忌へ母子の墓参心足る

鳥取市

岸本無人

見も知らぬ人に十円玉の恩
とりあえず棒の倒れた方へ行く
肩車雲まで届く手を伸ばし
善人の嘘に真心あふれてる

島根県

錦織文子

不きようなペン字で母の心着く
海の水掬ってもすくっても無色
言い争って愚痴ってるのも愛のうち
ばんのうを捨てたく滝に佇つ素肌

東大阪市

萩尾真佐志

成るようになりまます妻のいい度胸
闘病に空の青さはいつそ罪
年寄の釣師へ鮎が跳ねて見せ
澄んだ目の少年だった日の記憶

話題とぎれて風鈴の助け舟

寢屋川市

江口度

マンションのひと穴ごとに住む庶民
叱ろうと思えば土産下げている
もじずりよお前も右まき左まき

奈良県

村上春巳

裏道がわからず迷っている男
あびる程飲んで酒の値を知らず
新聞を閉じ善人のひとり言
かじられた脛の痛さを撫でておく

和歌山市

若宮武雄

貧乏の裸の誇りと恥しさ
都市砂漠砂一粒の泣き笑い
躓いて転んだことのない牛歩
文化とや電子レンジでサンマ焼く

今治市

越智一水

お見舞にゆき病人に見送られ
馬鹿な妹不倖な妹と受けとめる
愚痴でない妻の怒りの物価高
子のように妻に怒られうれしがり

鳥取県

林露杖

電休日雨に術なし句集読む
妻の愚痴合槌打ってきくも愛
主義主張持たぬ男の大ジョッキ
法悦の笑みを湛えて友眠る

大阪市 藤田 頂留子

松江市 柳 楽 鶴 丸

鐘の音まだ耳底に祭りすむ
大阪をあげて祭りのコンクール

辻斬りのようなひき逃げ事故の記事
のら猫の子連れ自殺などしない

離婚させるいたずら好きの神もいる
序列をつくる寄付ならやめておこ
派閥解散暴力団に似る
歌手がうたうと民謡の味がない

海南市 牛 尾 緑 楼

下関市 国 弘 半休門

麦メシのうまさ突然よみがえり

母ひとり子ひとりお茶の暖かさ

同舟の釣り場で大物賞狙う
根気よくやれば知恵の輪も解ける
留守番に來たがガス風呂電気釜

算盤の端は女が握ってる
鍵っ子の心の鍵は母が持つ

我が足をつめてみたい勇み足

島根県 大 野 醉 夢

諫早市 原 田 明 春

悔のない汗を拭った老いの坂

足袋一つ履けぬ子どもの舞い姿

どさくさの世相三猿どう生きる

神を呼ぶ罪の意識の中で呼ぶ

燃えつきても女未練の夢を追い
合鍵をもたせた謎がわからんか
血圧を薬でなだめなだめ生き
娘を叱りすぎて女房に居直られ

青森県 五十嵐 操 史

三重県 坪 田 冬 花

騙された方の嫌味がまだ続き

馬鹿のはく真面目を高く評価され

悔いのない生涯だった巨星墜つ

ひとときを心静めて神といふ

夢にでも会いたい母にまだ会えぬ
絵に書いた宝はどこでも落ちている
あんな物と笑う趣味へ古茶碗
得になる話になれば良く喋る

兵庫県 辻 文 平

岸和田市 島 崎 富志子

泣き虫の妻が泣かない娘の死

歌がチト上手でしたが村を捨て

亡母の名を忘れる程に星が降る

真中に母の座があり家平和

先生の古稀を祝いて
古稀祝い喜寿米寿まで祈りあげ
ローン済ませてこれからと言う人生
人生を鈍行で行く夫婦です

洋風になじまずジュウタン足をとる

和歌山市

西山 幸

ひとときの沈黙次の語が恐い

ほろびゆくものの愛しさ遠花火

笹舟の抵抗渦に立ち向かう

母の櫛母の月日を梳る

岸和田市

清野 こう

騙されてやろう夫のうそを聞く

金で得た目玉案じている達磨

或る時は横になりたい日の達磨

一票差目出度くあいた達磨の目

八尾市

宮西 弥生

終りよき主義でどん底耐えている

地位すこしもって祇園から電話

寿の袋にしては軽すぎる

迷うても男は動かぬ喉仏

島根県

木村 はじめ

老の趣味昨日の没句をバネとする

当選をすれば露地裏忘れられ

不利なこと忘れる都合のよい頭

吸い過ぎに注意と書いて値上げる

富田林市

岩田 美代

だあれーも知らぬ私と私の話です

風紋も残さずきれいに去った風

夕顔のつばみが動いた初夜である

減量へ喰うなと主人の眼が光り

子育てを知らずに愛が語れるか

返品のイザコザ運賃自腹切り

東大阪市

柴田 英王子

百事は勤儉以って家訓とす

老人居無事か洗濯物を干し

先方も私の出方見て静か

守口市

村田 瓢太

働けなくなれば男は邪魔にされ

一隅を照らす灯それでよし

しし同士がペアーになったバス座席

堺市

藤井 一二三

鈍行で生き各駅の風を吸う

七十五日供花も枯れて事故現場

おんな同士のいくさは足元から挑み

守口市

野呂 右近

学童に道をゆずって下ろす腰

紫陽花の色直して今朝の雨

古寺も拝み家路に向く散歩

大阪市

横地 雅風

スタートは一緒に課長に励まされ

灯台の余生は観光料稼ぎ

ハンドルを片手に当てる電気そり

大阪市

神谷 凡九郎

泥にまみれてこそ人間らしく見える
なんば考えてもこれがやつぱり私で
みんな違う考えがあり是非を問う

豊中市

増田次章

正論を云わせぬ空氣に身をまかせ

退職の朝の救いの妻笑顔

欠点は多いが俺は俺が好き

島根県

藤井明朗

私財ばんと寄付して暮しつつましく

お世辞の中の本心一転二転する

無人駅春夏秋冬花うごく

兵庫県

藤後実男

アルバムへお隣り誰れと妻がやけ

風鈴が忘れちやいやと鳴り続け

合鍵をもって二人の愛が覚め

藤井寺市

中原比呂志

切り出せぬままに凡夫の日が落ちる

例えばの話が僕にも突き刺る

遠巻きの外から威勢の好い啖呵

大阪市

西川善紫

泥田に降りた鶴だとは恐れ入る

よくやった心機一転はほんまもの

故あって母と呼ぶ人ふたり居る

兵庫県

河原みのる

ドンダリのおとなしいのが拾われて

腰浮かせ鴉逃げよか思案する
一切の役人米から去ってほし

鳥取県

川崎秋女

平等を説く女史の手の大ジョッキ

バラの持つ魅力に負けそで仰ぐ天

古疵を想い出させてカンナ咲く

河内長野市

井上喜醉

道草は意志薄弱の途中下車

じっとしておれぬ性分達者です

犬の餌心配してる母の旅

和歌山市

内芝としよ

うつむいて居ても女の眼が光る

利にさとい耳が集まり皮算用

自惚れて他人の傷に気づかない

東大阪市

竹中綾珠

父の頑固息子は継がずほつとする

鳩と雀仲良くごみ箱あさる街

もう一生飲まぬ積りの禁煙す

美祿市

安平次弘道

エリート視野に拡がる未来像

一合の徳利が父の充電機

枕木に徹し万年平社員

鳥取県

森田布堂

空白を残す苦心の筆さばき

酔いどれの頭のれんを突いて出る

蒸発の母を涙の児が責める

岡山県

出原敬一

岸和田市

福浦勝晴

玉の汗蝶とる子らの苦心談

笑い合う気安さ隣も無位無冠

小走りの和服何事かと見られ

米子市

石垣花子

ガンでない安堵で見舞の返事書く
老妻の認可で出かけるパチンコ屋
「集金に出とる」と集金断わられ

岸和田市

狭間希久志

カセットもご詠歌寺のバスの旅

青年僧諸行無常の顔もせず

予算額余して妻の旅終り

富田林市

中村優

肝心なとこぼかされる涙声
ミスはミス素直に詫げる娘の勇氣
出しやばりが顔を売ってる披露宴

枚方市

水野弘

句読点すこし外れている代理

立前の父と本音の母でペア

貧乏が聞かせどころの立志伝

富山市

桑田静子

時計など忘れて酔い度い理由があり
浮木が立つ手前一びき跳ね上り
通り抜け押されて押して見た桜

岡山市

時末一灯

新興の街から方言消えかかり

理屈ではない雷の恐ろしさ

御無沙汰をせめて逢いたい母の喜寿

松原市

北野久子

一粒の涙水平線に散り
終列車独りへ冷房やけに効き
この先はだから坂をマイペース

出雲市

板垣夢酔

子育てに少しやつれた嫁愛し

気短な夫が筆談してくれる

聴えない辛さ夫の愛で埋め

大阪市

黒田真砂

抜き打ちの構えでライバルすれ違い
太陽の下請している乾燥機
中味より母の自筆に感激し

貝塚市

行天千代

一筋の道を親子で探り合い

未完成なところが憎めぬ娘の育ち

あじさいに若き日を見る雨あがり

申年の梅どっさり漬けて心満つ
古稀過ぎてまだ生きる氣の医者通い
今日ひと日無事に生きたを喜びぬ

大阪市

本間満津子

一直線に私も走って見たくなり

ある日の謀反財布を空にしてしまひ

お気に入り順に水やる植木鉢

奈良市

宮口 笛生

職退いて昼のテレビを妻とみる

晴耕雨読日記に今日も雨と書く

百姓になりきる畑の夏野菜

島根県

西村 早苗

企みを持つコーヒーにひまをかけ

逃げのびた靴のよごれを拭いている

酔い薬夫婦で飲んで旅にいる

奈良市

森田 カズエ

軍服の写真が母の宝物

分裂の舞台黒子がよく動き

肋骨の一本ぐらいと医者はい

羽咋市

三宅 ろ亭

勇み足たまにするから親しまれ

夕立へ戻ってよかった安堵感

欺いた積りの敵から塩届く

加賀市

細呂木 魯木

期待した余生を悶々病んでいる

汗ばかりはら立ちさも無く貨物駅

どちらにも似てて陽気なパパとママ

枚方市

稲葉 星斗

愛らしい目を動かして小フナ釣れ

大へうの糸重々と岸に寄せ

習慣はマンガを読んで釣りに凝り

唐津市

新岡 回天子

此の辺の曲りが家だ市街地図

大金のかくし場枕の下にする

共稼ぎせぬでも良い年子が稼ぎ

大阪市

室谷 徹舟

末席で筋を通して来るへんこ

当り前それが出来ない情なさ

物よりも人の心の有難さ

竹原市

森井 菁居

足踏みを許してくれぬ男坂

大風呂敷ひろげ自滅の音を聞く

思惟の旅自由日記が性に合う

松江市

梅本 登美也

信じ合う夫婦にまるい月が出る

ハーモニカ昔はやった唄が好き

無我夢中やと小さな家が建ち

七尾市

松高 秀峰

走るから泣くから小犬追ってくる

運勢を笑い飛ばして挙げた式

ライバルの栄転にがい酒で酔い

呉市

林野 甦光

目立たない町で心の糧拾う

後を継ぐ子の眼が心もち据わる

老農の素足に秋が声をかけ

大阪市 神田秀峰

平田市 久家代仕男

平役で非凡の大型埋もれてる

平和とは名ばかり鍵の要るお国

殺人も精神分裂なら無罪

榎原市 岩井本蔭棒

大阪市 北勝美

ゆずり合う善意の席へバス揺れる

人知れぬ善意は神が御照覧

駅ごとに定年пойと降ろされる

岡山市 井上柳五郎

大阪市 欄蘭

日本のふるさと能登の地で出合い

朝市にひと握り葱媼は置き

生つくり姿をほめて賞味され

綾瀬市 大山と金

姫路市 大原葉香

孫のくせ悪いところは嫁に似る

蠅を見てなるほどうまい一茶の句

差別してむりやり老の座につかせ

岡山市 岩道博友

東大阪市 本多清人

道程を自分の歩速で教えられ

訪う人も無くて勝手口だけをあけ

疲労した妻の軋は我慢出来

鳥取県 清水一保

町田市 竹内紫鏑

有り余る米とも知らず早苗伸ぶ

勝った負けたと公約置いたまま

入間の営み小さく見る雲間

(機上にて)

双六の上り帽子は要らぬ職
老いてみなセルフサービス無事動き
平均寿命越さない計報ばかり来る

京都市 山本規不風

誕生日思い出させた妻の酌
夫婦して飲む茶に違ふ明日を見る
敬老会葬儀屋からの記念品

岸和田市

原 さよ子

お喋りがまだ弾んでる回覧板
同級生私もおんなお婆ちゃん
物言わぬ達磨に根性教えられ

岸和田市

古 野 ひで

平和です雀と対話の昼下り
関白も娘に甘いところを見せ
開票を片目の達磨待ちこがれ

鳥取県

金 川 満 春

生甲斐と言えど結局金の事
ヒロインの美貌魔性となる流転
気兼ねする事も覚えて兎の礼義

出雲市

高 橋 可保留

息止めて白紙へ一気に書く辞表
風邪気味が釣れた話しへ起き上り
お喋りの佳境は箸を持ったまま

八尾市

納 糸 葉

戦いがあり正確な時計持つ
細い川細い主張を持ち続け
長い長い手紙に溺れそうになる

ホノルル市

前 山 北 海

好のまじや耐えること知る女

他の女の讃辞続けばねたましく
人間は曾呂盤でない無理すまい

岡山市

花 田 たけ志

過密化が畠を山へ追い上げる
輪に居ても拍手はしないおつき合い
母を呼ぶ声が輪禍の的となり

東広島市

高 橋 鬼 焼

子よ走れ虹のドラマが消えそうで
よくしゃべる女と人形眠れるか
山となら話せる父のビッケルよ

和歌山市

坂 口 公 子

従いていくばかりで何時も白紙です
飛躍する翼が欲しい松葉杖
十年も若かったらと言う自信

和歌山市

浦 野 和 子

四季うつす川古里にある救い
旅かばん明日の期待を詰めて寝る
窯出しへ集まる期待とおののきと

堺市

大 道 美乙女

言う事を聞く釘きかぬ釘もある
今だから失敗談が面白い
スキヤンダル重ねて女優箔がつき

正 本 水 客

沙羅双樹の花

梅雨にうまれた白か花濡れそぼつ

沙羅双樹 椿の白に似て小さき

梢から花咲きさがる半月をかけて

一夜花の夜散って夜咲く潔き

てんでん てんでんと散り花の白ひたむきに

浜田 久米雄

永平寺僧の頭の青きかな

前向きに歩こう野心などはなし

葬式の電話がかかる淋しい日

近回りして幸運をまた逃がし

いつまでの寿命か貯金帳に入れ

本田 恵二朗

貯えた矢の使い方忘れはて

盃をあつさり伏せた下心

旅路ふとわけありそうな比翼塚

なつかしい景をさかなにもてなされ

真すぐに森を貫く陽のさやか

川村 好郎

借る方は中腰などは気にしない

今日の風今日の風鈴へ音たしか

喋っても黙っていても夫婦です

返し針心の傷を縫うて寝る

八方美人と知ってて男うぬばれて

橘 高薫風

梅雨ついてブルートレイン青深め

親しきはねぶたの顔でお出迎え

恐山四人四本の死人花

恐山空焼けるととき恐山

二代目津軽家すわ子さんへ

潮風へ涼しき津軽おはら節

菊沢 小松園

南無阿弥陀仏で避ける世間の風あたり

攻め過ぎた桂馬の不覚放つとけず

予期してた道は一本だったはず

兎小屋より大きなとこを知らぬまま

都会の空気知って帰ってまた家出

西尾 栗

金魚掬う金魚の柄の浴衣着て

炎天の蟻勤勉の二字にされ

おはぐろとんぼ川の流れに逆らう気

忘れることが幸福とはみじめ

地獄の方は満員で今日も生きている

若本 多久志

これ以上瘦せる術なし酷暑かな

活淡無欲 それが長寿と論される

老骨を惜んで山ほどしたいこと

糾える苦楽 それでよし生きぬかん

新聞の訃報なる程適齢期

川柳 太平記 (28)

川柳の呼称について

東 野 大 八

なぜ前句付の呼称が川柳なる字句で定着したか、この辺で一応の解明を試みておこう。

前句付が一句立てとなり、上方から江戸へ下って江戸句となり、それが川柳点または川柳風となり、ついに今日の「川柳」として世に通るわけだが、この川柳で定着したのは、識者の間でも、明治に入ってからというのが常識である。しかし、事実の可否は果してどうか。以下それを解明しておこう。

とにかく特定の一人物の表徳なり、芸名がその斯道の呼称として後世に残ったのは、あとにも先にも、わが「川柳」と芸能部門での「義太夫」の二つしかない。柄井川柳とは、果してそのような卓絶した人物であったのかどうか。まずこの問題について、柄井川柳そ

の人のタナ下ろしからはじめよう。

「川柳が当時、前句付の作家として技倆が卓越したか」というと、非常に怪しい。それ程秀抜な作家ならもう少し川柳作と銘打つ作品が残っていなければならぬのに、今日我々の眼にふれるのは十句に満たぬ数で、しかも、あまり感心した作品ではない。

こう考えると川柳が当時の作家に推服せられ勢力があったのは、作家としての技倆より「選者の技倆によるものだ」と断じてさしつかえない。川柳春秋・昭15年二月号・山崎麗「とにかく作家として名句を残した訳でもない、判者として後進を導く指導原理を示したわけでもない、ただ暦摺の万句合に川柳評として点者の位置を示したのと、柳樽を媒体

としてその存在を明らかにしただけで、昭和の今日まで、民衆詩の守本尊として尊敬せられる点、どう考えても、柄井川柳とは「果報者」の、果報の二字に価する人物と思う。」

(三味線草・昭和8年二月号・木村半文銭)

このデンで、川柳なるペンネームが短詩型部門の文字通りの表徳として、その史上に残るとすれば「発句は俳聖芭蕉の貫禄十分なるにせし、俳句と名づくより芭蕉と名づきべきが至当ではないか」と半文銭は右の抄録の中で皮肉っている。

さて、川柳の呼称の向うを張った義太夫の名が出たので、一応これにふれておこう。

義太夫は、元禄期に三都に発展した浄瑠璃節の別名だが、その祖竹本義太夫は通称五郎兵衛という大阪天王寺村の一百姓だった。

寛文・延宝の頃、京都に宇治加賀掾、大坂に井上播磨掾が世にきこえていた。この両者の先達たちがものした一中節、常盤津、清元・新内・富本が母胎となって歌浄瑠璃が生まれたわけだが、天王寺村の五郎兵衛が、この歌浄瑠璃を味討求真して義太夫節を創案した。

彼は生来、声量曲節に天与の才能を持っていた。彼は先達の前記二大大家から、彼独得の「語り」をひき出した。即ち播磨掾は地節

長く、音を表とし、節を裏とした。これに對し加賀掾は地節短く音を裏とし、細やかな節を表とした。この二大家の持味の長所を一つに独得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

が、音と節の長所を一つに獨得の語りを編み出した五郎兵衛は、當時の一流大家である近松門左衛門を擁したこと

り、同四篇序には「諸君連のひねり出せし絶妙好辭の品定めせんこと川柳のいとかたきことなるを……」とある。

この浪華柳多留は、江戸の柳多留を模した体裁のものから察すると、柳多留が上方にも入っていたことを示している。江戸・上方の往来頗繁な書肆、貸本屋、出版の商法の産物とみてよい。

文政四年から天保十二年まで生きた肥前平戸藩主松浦静山の「甲子夜話」は、川柳や狂句をさかんにとり入れている点は、識者間でもよく知られているが、ここには明確に「川柳」という点者あり」といい、川柳点や、川柳風を「川柳」と処理している。

このようにみえくると、柄井川柳在世の頃からその点者流の、川柳点や川柳風なる前句付は、洒落本、よみ本、黄表紙、八文言屋本の中で、草耕の利便上、総括して「川柳」という呼称が、定着し固有化する道程を作ったとも考えられる。

最も安政初年に四世川柳が創始した「俳風狂句」が、次第に幕末期のデカタンズ調を反映し、「川柳」に代る「狂句」が明治期まで継承され、曲折のち明治中期においてはじめて、川柳なる呼称の復権をみることになる。

・句碑余聞・

十日のあやめ

菊沢小松園

六蒲十菊を地で行くような今となつては聊か旧聞に属することかも知れない、句の抜けた線香の部類に入るが、それは先き程八尾の上の太子勝軍寺に建立された某さんの句碑祝賀記念句会の帰りの節、又暫らく会えないと思つて帰り際に句碑の前に行つて見た。思いは同じで数人の人達が去りがてに佇つて居たが、その時人々の背後から突然、山陰木次から遙るばる来られた堀江正朗さんが何うしても句碑に触れさせて呉れと同行の藤井明朗さんにせがんで句碑の石組みを両手で確かり掴んで離さない。無理もないことと私も思った。如何に句碑が立派で、その句の文字が雄渾活達な某さんの筆のあとでも、正朗さんには見えないのである。せめて碑面の文字に触れたという当人の切ない希望には誰も尤もだと思つた。

あの高い碑の前の石組みに阻まれて到底、碑面の文字に届くべくも無い。それでも正朗さんは石に足を掛けて登ろうとする。必死で

ある。明朗さんが尻を押しても仲々上らない、居合せた数人の人達が力を合せて押上げた。私もその中の一人であつたのは勿論である。漸やく上半身を石組み上に出して碑面に近づき正朗さんの手が、指が銘板の文字の影りを逐っている。その時の正朗さんの嬉しそうな眼、やつと希望が叶つたというような満足感の漲る眼、といつても戦争で国家に捧げた悲しい眼である。

碑面を撫でている手も嘗つては大陸で迫激弾を握つて敵陣に近づいて行つたであらう護国の勇士の手である。居合せた人達は固唾を飲んで皆々無言の感激の一瞬であつた。華麗な今日の除幕式の一環である。印象深い、いつまでも忘れられない句碑への余香であると言いたい。

多くの川柳塔の中で第一級と言つて憚らぬ雄渾の筆の某さんが精魂込めての筆の跡、悪からう苦はない。生涯最上の筆蹟を私はいつまでも紙めるように眺めて居た。人の声に

促されてやつと帰路についた。何時も思つて居ることであるが、近年川柳界の句碑の建立ブーム調に対して色々な句碑に対面して感ずることは、句碑の句は勿論ながら文字の余りにも無造作に書きなぐられていることである。水府、路郎両先生の句碑は別として句碑の筆蹟は兎も角石に彫られて今後幾十年或いは幾百年も後に残るのである。少なくとも、さすがに俳句の人達の句碑は余りに顔を顰めて見る程の句碑は殆んど無い、文字の国日本の句碑として残されて居る、川柳の句碑が俳人にこれが川柳の句碑であると胸を張つて見て貰えるものがいくらあるか、メモや楽書きとは違ふのである。彫師の石屋が吹き出すようでは困るので飽くまで石に彫るのである、後世に残るのである。多くの人達の眼に触れるのである。何故そこまで思い及ばないのであるうか。俳句より問題にされなかつた過去の事実にも案外こんな処にもある意味の胚胎しているのでは無からうかと思ふ。暗がり子供が書いたような筆蹟は今後決して石には彫られぬことである。尚悪筆の見本のように言われる菊池寛や武者小路実篤もあそこ迄徹底したらまた風変りな意味づけもあるがとおもつ。尚当分続くであろう句碑ブームに後日のために充筆を馳せる次第。

俳風柳多留廿五篇研究

— (三二丁) —



入江 勇

室山三柳・入江 勇・西原 亮
清 博美・八木 敬一・紀内 恒久
青木迷朗・鈴木 黄・故岡田 甫

550 下戸ならぬ男にこまる花のくれ

室山||花見の夕暮風景 「下戸ならぬ男」は

生酔(泥酔者)。「げこならぬこそ、をのこは
よけれ」(「徒然草」一段)の文句の引用で、
意は別として、主題句のばあいは逆。

大きなだつ子引ッばる花のくれ

二三・28

式度とハつれぬとさくらへ下戸く、し

二〇・2

しかし、生酔としては、

清盛の扇のほしきはなの山

七七・3

の心境であらう。

八木||賛。

下戸ならぬこそと雪見に二三入

五三・3

紀内||賛。『徒然草』の引用とは卓見。

青木||同。下戸||酒を飲まぬ者の通称。

鈴木||著聞集六「日頃はナべて一かはらけだ
にもえ飲まぬ下戸なりけるが」とあり、下戸
は飲まぬ者というよりも、体質的に酒を飲み
得ない者と考へたい。

岡田||賛。

551 たてよこに内ちう歩行い、女郎

室山||「歩行」は、あるく、と読む。売れつ

子の遊女。「たて(縦)」は廊下を、「よこ

(横)」は部屋へ。その廻しの数の多いこと。

八木||賛。

よつぴとひ他出しているむこひやつ

拾七・28

青木||同。嫌いな客を避けて間夫のところへ

こつそり行くことを「横にゆく」「横にくる」

「横はんをきる」などという。

堅の物一ツさづけて横に来る

(一二三乙・33)

西原||賛。「たて・よこ」は吉原用語なのだ

ろう。一般には、

堅横の五尺にたらぬ草の庵

(芭蕉)

で、現在と同じだ。

鈴木||賛。売れつ子の遊女につきると思つが

「たて・よこ」を吉原用語と限定するのは一

寸賛成しがたい。

岡田||鈴木氏のいうように「たてよこ」は吉

原用語ではない。青木氏説のように、横番を

切らねばならぬような客が、何名か来ている

流行つ妓。

552 酒呑ミハまんちうの子にしめられる

室山Ⅱ「酒呑ミ」は酒頼童子、「まんちう（源）満仲の音読」の子は源頼光。大江山の鬼退治の話である。辛党と甘党にたとえたところがミソの句。謡曲「大江山」、御伽草子の「酒呑童子」などが素材。

下戸の子に上戸つぶれた大江山

四七・13

まんちうの子が酒呑をぶつつぶし

三八・37

西原Ⅱ賛。酒呑童子は越後の産の由。「越後国何某が妻胎る事十六ヶ月にして云々」（『前太平記』）。その名の由来は、「我名を酒呑童子と云う事は、明暮酒を好きたるにより」謡曲「大江山」。越後杜氏に関係があるかもしれない。

岡田Ⅱ同。

553 門松に藁のこっふをく、しつけ

室山Ⅱ「藁のこっふ」は、鍋島家の藁鼓。その頃、「こっふ（コップ）」といったことばを見立てに使ったところが作者の自慢であろう。「忘れ残り」に「鍋島家は松かざりのうへに、藁には鼓の胸をつくりて鋳る。甚見事のものなり」とある。他にも佐竹家の人飾り

や、南部家の種々の物をつける松飾りなどもあり江戸の名物であった。

松竹の中に鼓の胸ばかり

八〇・16

三味線と鞍は江戸の飾り物

一五〇・15

（三味線堀は佐竹家）

入江Ⅱ賛。左右にハ琴真中ハつゝみ也

二七・7

西原Ⅱ賛。コップの使用句に、

コップのやうに上へ明く傘

ケイ十三

岡田Ⅱ同。

554 畳さしあたまへさひたもめん針

室山Ⅱ「川柳江戸職業往来（国文学39・9）大坂芳一」に、「落し忘れた針が古くなって出て来たのを、畳をあげた時に見つけて頭にさしているといった句」とあり、この句解でよからう。

入江Ⅱ賛。

せわしなくほう杖をつく畳さし

一一三・36

手裏剣を打って畳屋のびをする

一四五・30

岡田Ⅱ同。

554 三会目生れかわった女郎出る

室山Ⅱ「三会目」についてはいままで何度も説明があったので省略。初会・裏に比べて遊女の態度約変、そのもてなしぶりの違うこと

違ふこと。よくすればするほどげびる三会目

傍一・30

岡田Ⅱ同。

556 三の切のしゆかう仲光がはじめ

室山Ⅱ浄瑠璃戯曲の三段目の切が「三の切」。浄瑠璃の時代物は五段組織になっていて、第三段は葛藤の最高潮で、その切は、殺人、自殺などの死を予感させる愁嘆の眼目の場面で「愁嘆場」とよばれる。「仲光」は、謡曲の曲名でもあり、シテ（藤原仲光）の名でもある。主君多田満仲に中山寺にありながら学問・手習の修行を積みぬ（主君の子）美女、丸（美女御前）を討つことを命ぜられ、自分の子幸寿を身替りとする。後、恵信僧都のとりなしで美女丸は許される。といった筋で、まさに浄瑠璃の時代物の「趣向」の元祖のような曲である。

入江Ⅱ賛。

満仲ハ子にあまそつな名なれども

岡田Ⅱ同。

桜14

母親と母の句

若本多久志

たしかこのテレビは七月の初め頃NHKの総合TVで「子供ホテル」と題しての放映だったと思う。

その内容は高級託児所とでもいうべきで、保母の有資格者を再教育して、情操面での心遣いに重点を置いた託児（一歳—六歳）を行うホテルで、既に東京都内にも数カ所開設されそれぞれ繁盛しているそうである。

その料金は一日（二十四時間）一万円、時間預りが一時間五百円、月極め（除日曜）が二十万円との事。

私はこれを視聴しているうちに身体中が冷蔵庫へでも這入ったように寒々としてきた。

若い夫婦が共稼ぎしなければ生計がたない場合、やむなく公営や私設の託児所へ夕方まで子供を預けるのさえ、母子の絆にひびが入らないかと不安感をもつのに、一カ月二十万円もの託児料を支払い、社会に出てどんな

立派な仕事が出来るとせよ、子供とのスキンシップは日曜だけという育児を、平気でやっている若い母親が増えてきていることを嘆かすにはいられなかった。

そんなことを思っている裡、日経紙夕刊のコラムへ京都の小松満貴子さん（経済同友会事務局長）が、小学生の子供を母親に預けてアメリカへ留学したいと考えるその為の勉強中、外国語講座のテキストで、次のような文章に出くわし、遂に留学を断念したという思いを書いておられた。その文章はある青年が、「僕はいつも母親の前へ出る」と何か他人のようないきなり感じる。それは昔、自分が一番母親を必要としていた頃彼女は自分のそばに居てくれなかったからだ……」

私はこれを読んで思わず膝を叩いた。吉川雄二郎（英治）先生の句にも

お母さんと呼んでみし用もなければ

おふくろは俺におしめも当て兼ねず
母あらばなど想う日の梅うらら

とあるように、子供は常に母親を慕い、母親が居てくれることに心の安らぎを覚え、さらに励ましにさへなるのである。

このことは独り日本人ばかりでなく、有名な発明家エジソンの母親は文盲の女性だったが、息子の勉強中は深更まで起きていて温かいコーヒーと夜食を彼の部屋に運んでくれただけで、この偉業が達成されたのだとその自叙伝に記されている。

さらに「人民の、人民による、人民の為の政治」で善政を謳われたアメリカ第十六代大統領、リンカーンの母親は、壁もない丸太小屋に枯葉を床にするという苦しい生活をしながら、溢れるばかりに注いだ愛情で家にある唯一の書籍、一巻の聖書を暇ある毎に読み聞かせ、又知る限りの話を語った。

それがどれだけリンカーンの研究心を育み、その胸底に刻まれて、生涯の清泉となり立派な人格を形作つたと伝えられている。

しかも前述三人の方は成人の後もしも母追慕の情念が増すばかりだと述べておられる。

ここまで書いて私はふと、川柳塔誌七月号の巻頭言で生々庵主幹が「母の日」と題して書いておられたのを思い出して再読してみた。それは今年五月十一日、薫風さんが東洋樹賞を受けられる、時川大会へ出席の途上、車

中での感想である。

『実は私はいつの頃からか母の日が楽しく思われないようになっていた。白とか赤の花を襟にさして街を行交う人々が母のない私を見つめているような気がしてならなかったからだ。しかし今年の母の日は別だった。神戸で薫風さんが東洋樹實を受賞される日なのである。浜子の自宅から電車の中でしみじみ母の日を反芻しながら味わい続け、こんな「母の日」にこんな欣びを、丈夫でお元氣な母堂の膝下で、ひと倍母思いの薫風さんほどどんな氣持で迎えているだろうか。おそらく薫風さんの最良の日であろう。

私は心からの祝福と、ちつとばかり妬ましさも入り交って、とうの昔、母を亡くした寂しさとか、母のない僻みなどはすっかり忘れてしまっていた……」云々。

生々庵主幹の母親思いは彼の句集「生々楽天」の随処に現われているが、前記リンカーン、エジソンの伝記や吉川英治の遺句に勝るとも劣らない思慕の情念がうかがえると思うのである。

その代表作の中に

日に疎くなりそうもなし母恋し

祝膳一つは亡母に奉り

今更に海山千里 母のこと

などの句があり、さらにその生々庵主幹を妬ましさ交えて羨しく思わせた薫風氏も、親

孝行という点では人後に落ちない。その作品

都会の夜 セロリは母の香に似たり

暖かし孟母のような母ならで

もう嘘と見抜いて母の眼が優し

などでもそれがうかがえるのである。

最後に、私事に亘つて恐縮だが、八歳で父を十二歳で母を亡った私が、母の慈愛に触れたのは物心がついて五六年間ぐらいだった父の死後苦しい生活の中で母の愛情は焼きつけたように今も胸に残っている。

成人して経済的にもゆとりの出来た頃、金沢での友人が母親の希望で京都の本願寺へお詣りにつれてゆく話をした時、私は「母が今でも居てくれたら、俺にも京都はおろか日本中を自分の車で見物につれていく孝行が出来の……」と胸のつまる思いがしたのを忘れない。若い頃、短歌をやっていた啄木が好きだったのも彼の歌に母を詠んだものが多かったからだろう。一番好きな歌は

たわむれに母を背負いてその余り

軽きに泣きて三歩あゆめず

で亡母を思い出す度によく口ずさんだものである。

その後川柳の畑へ入って四十年余り、この想いを十七文字に託して切々と訴えてきた。

そらごとの世に真実は母一人

母の日のなかつた頃に母は逝き

生き抜いてぬいて母の手荒れ給い

など拙作ながら前記の方々に続く思慕の情念である。

川柳塔同人吟の選を仰せつかつて、つい母の句が目に入って頂いてしまつので自省しているが

地の底の母までとどく冬の雨
安らぎの寝息を聞いて母である
貧しさを越えた笑顔は母のもの
抱き上げた母の両手の広さかな
着飾らぬ女に母の顔ダブル
昆布煮る匂いの中に亡母と居る
忍従の道を諭して母哀し
結び目の固さに母の愛がある
母背負う母の重さにたたら踏む
児のおしめ換える十指にある祈り
これらの句はどこへ出しても一流の句ではなからうか。

ああ、母親の愛情に栄光あれ。

五百円で出来る合本

本誌の合本が五百円で出来ます。但し二十冊以上かためた話です。表紙はありません。本そのものを十二冊綴じたものです。

ご希望の方は本社へ雑誌を届けてください。出来上つたらお知らせします。

第15回路郎賞
第14回川柳塔賞

候補作品中間発表

自 55年5月号
至 55年8月号

路郎賞候補作品

(到着順)

正 本 水 客

冷凍魚成仏をした貌でなし 月原 宵明

一滴のことでコップの水あふれ 塩満 敏

水草も風に堪えてる動きする 黒川 紫香

押しやれば手元に戻る流し雛 久家代仕男

ライオンの風格に似て子が這うよ

小島 蘭幸

大人にはいまだになれぬくすり指

小出 智子

墨色に笹の葉すれのときめきぬ

水粉 千翁

貯めといった言葉がすでに湿ってる

岩田 美代

土砂降りには水の炎を見てしまふ

高橋 夕花

顔見れば直ぐ泣く病人見舞いかね

木村はじめ

ためされているとも知らずまだ喋り

児島与呂志

古い二人老い一人から羨まれ

工藤 甲吉

裏切つてみようか花を買いました

合図は何もない妻と僕

極楽は今だと思ふ蜚舞う

春うらら新芽につこり土を割る

チリほどの虫にも生きている歓喜

子らの目へ母平等に切りわけ

ジーパンに嘘も隠しもない若さ

運だけと云えぬ人生ふりかえる

こまねずみ楽になれぬを不思議がる

老兵同志会えは慰めあう世相

ホームラン納得させてボール飛ぶ

日本に生れてよかった木の芽和え

母の日も忘れられてる母も居る

生きてゆく庶民の汗に嘘はない

職人が我が学歴を恥とせず

ひと粒ずつ祈りの中で梅漬ける

如意棒が欲しいと思う日が続く

工藤 甲吉

小林由多香

横田 英詩

増田 次章

稲田 豊作

高橋 操子

黒川 紫香

欄 蘭

藤村 乙女

柳楽 鶴丸

野村太茂津

浦野 和子

工藤 甲吉

小林由多香

横田 英詩

増田 次章

稲田 豊作

高橋 操子

黒川 紫香

欄 蘭

竹中 綾珠

藤村 乙女

梅本登美也

高橋 夕花

小幡 里風

工藤 甲吉

小林由多香

横田 英詩

増田 次章

稲田 豊作

高橋 操子

黒川 紫香

橘 高 薫 風

胎動へ毛糸いそいそ減つてゆき 仲とんたく

肩書のない父人間味がにじみ 田垣 方大

七色に暮れる山あり露天風呂 若柳 潮花

靴紐を結びいくさの型になる 時末 一灯

古文書のように出て来たラブレター 萩尾真佐志

ぬるま湯の中で一掬の血を押え 福田 保子

大き過ぎる小さ過ぎると旅靴 安藤寿美子

硬骨で鳴らし屋台の一人酒 牛尾 緑枝

宿命か悪人なりの死を選び 藤井 春日

課長補佐酒の飲み方まで教え 野田素身郎

アドバルン下界は殺気溢れてる 藤井 明朗

ジョギングの護衛に夫も走られ

旅の町このままここに住めそう

西森 花村

老いて就職色盲の図に答え

八木 千代

風止んでひもじい顔に鯉のぼり

竹内 紫緒

藤田頂留子

西 尾 葉

文化とは女に暇が出来てくる 金井 文秋
手加減をしたのが貰い子にこたえ

さよならと言えば明日から敵になる 白井三林坊

長生きをすると言われたおそろしさ 辻 文平

座禪組むようにいい蛸蒸し上り 遠山 智子

夫より保険会社がたよりなり 西森 可住

唯我独尊友達などはいない釈迦 香川 花村

医大バス父は植物人間で 久家代仕男

まっすぐに歩けば風も陽も味方 嘉数千代香

思い切り左へ寄ってしゃべって見 河井 庸佑

アドバルン下界は殺気溢れてる 藤井 明朗

老いの意地へんところで正座して 堀江 正朗

忽然と消えたし零番ホームから 谷垣 史好

内孫へ外孫が気の強い処を見せ 弘津 柳慶

骨しゃぶる成程鯛と申し上げ 水粉 千翁

恋の字もつす汚なさの歳となり 高杉 鬼遊

川村好郎

諦めてからを余生と云うものか 小出 智子

古い傷紙め合い何の足しになる 谷垣 史好

満ち足りた女が好むきつい坂 坂口 公子

石沈む石のなげきを知る波紋 嘉数千代香

ああ云えばこうと世間は跳ねかえり

香奠を数える指が愉しそ 桑田 静子

み手洗に嗽ぎ切れない顔もくる 高杉 鬼遊

暗やみになれてまわりの影も見え 中川 滋雀

妻の顔お茶つく音のなかに書き 八木 千代

空想の果てに置いてた虚栄心 堀江 正朗

方程式とおりの男で酌ぎにくい 河野 君子

裏切りの胸で十字架病んでた 小林孤呂二

哀しさをかくす絵具の彩がない 両川 洋々

割り勘で別れる確かな友が居る 森井 菁居

女は今日男は明日を考える 児島与呂志

化けているつもり尻尾つかまれる 内芝としよ

骨しゃぶる成程鯛と申し上げ 小林由多香

止り木がないと眠れぬ鳥になり 水粉 千翁

どの顔も金が欲しいと言わぬだけ 黒川 紫香

いたわりへ危つく寡婦を忘れかけ 工藤 甲吉

川柳塔賞候補作品

大坂形水

海青く青く魚の声を聞く 森田 熊生

四季咲きの花の心にさかろうて 小谷 葉子

太陽の恵みに麻葉の実が育つ 中森葉士人

ゆるされる範囲で炎今日も燃え 田中紀美代

東西屋の哀しい笑い紅がおち 高杉 千歩

汗しみた拳骨だからよくこたえ 朝倉 大柏

職人に連休はなし子を叱り 清水 健司

わびしさに共鳴してるおでん鍋 越村 桂梢

妻からの電話下着を換えろとか 矢野 佳雲

雑然と記者の机は生きている 有働 芳仙

黒川紫香

子は親の傘のしずくをはねかえす 園山 栄

梅描けば梅もむずかし冷える夜 高杉 千歩

たとし紙の中で切り札温めてる 小谷 葉子

嘘しませると話円くなり 武田 照子

なみだが落ちそうだから空をみる 吉岡きみえ

赤電話横からうまい嘘を呉れ 有働 芳仙

大胆な女は踵返さない 園山多賀子

洗濯のしたくなる様な川に出る 坂部紀久子

雨を呼ぶ唄しか知らぬ雨蛙 池田 半仙

合せ鏡の間で女の夢が翔ぶ 村上田鶴子

西山 幸

▼おわび—
戸田古方氏が入院療養中で選考締切後原稿到着(P53)

編集部

水煙抄

菊沢小松園選

鳥取市 森田熊生

決心をつけると刻が速くなる

山一つ越えると夏の顔がある

思い出を埋めた砂丘が削られる

あさがおのつるはあくまで巻きつく気

海青く死ぬ気の二人とも知らず

西宮市 野呂鶴汀

一周忌もう悲しまぬ人も増え

金できて友人一人去り二人去り

盛り皿へ互に遠慮して残し

畦道の童は村の絵にはまり

口髭のどこか淋しい威厳なり

唐津市 浜本久仁於

人間を棄てて生きろと悟り得ず

父の日の酒は墓石へかけてやり

別々の顔で出てゆく昼と夜

今日までは握手が出来る投票日

自民庄勝

火はつけたものの相手は焼け太り

鳥取市 中森葉士人

ビヤガーデン夜空を星が流れてた

病んだ日もやっぱり左向きに寝る

待たされて待つて匂いの風を嗅ぐ

ショウウインド今年の夏があり余る

新宮市 辻はじむ

倅せな茶碗は倅せな音で割れ

逆らわぬ事にしておく三リンポ

一筋の道ひたすらに蟻の列

星になる夢は消せないシャボン玉

京都市 山本桐下

錆びず曲らず古稀を迎える木綿針

親に似る子の血の濃さを怖く見る

雨も又たのし飯場のあみだくじ
首縦に振ったが煮えかえる腹の中

大和高田市 岸 本 豊平次

幼い日この叢に水車小屋

焼けぼっくりとうとう燃えないままに消え

浮草も風のままにはならぬ意地

念を押す本当ほんとが気にかかる

大阪市 白 石 潔

公園の家鴨ひねもす羽づくろい

家鴨にも派閥ありそな列が出来

夕立はかわりもなしかいつぶり

老人はお呼びではない車中ピラ

新潟県 高 野 不二

落選はあわれひげ迄のびている

余る米やせる苦勞と世がかわり

夫婦茶碗なぜ大きさに差をつける

ネクタイは犬なら首輪に当る苦

米子市 寺 沢 みどり

日本語がやつの年齢から英語塾

頭から叱って寝顔にそっと詫び

腕枕しびれて童話まだ続き

旅慣れて発車時刻へすれすれに

今治市 矢 野 佳 雲

安堵して休む枕が家にある

合掌の指それぞれにずれがない

気が立った時は辞表がすぐ書ける
クモの巢の形でたためては出来ず

呉 市 山 根 里 香

走らねば負けそう向い風が吹く

ライバルとつないだ手から虹がたつ

無視された鈴は悲しい音で鳴り

定年の父の翼は破れそう

旭川市 朝 倉 大 柏

印相も家相も口にする不運

よい方にとつていたわる老いの部屋

いい酒といわれていつも酔えず止め

咲きそうになると大事にされる花

山口県 高 崎 喜 一

玄関を出れば自分も敵になる

税務署に睨まれるほど儲けたし

新妻の手で靴ひもも結ばせる

予定表くるったままで年を越す

竹原市 古 田 寛 子

七夕のおねがい短冊そよとゆれ

糸でんわ声がまあるく響きます

家計簿の赤がつづくよ児は太り

島根県 松 本 文 子

死ぬ時に返えず仮面を整理する

暗闘はフト良心の迷うとこ

一滴の血で温まる母子草

人間の裏地のほつれ見て終い 妻はもう俺をまたいで平気なり 嫁った娘の箸が残っていた朝餉	熊本市	有働芳仙	炎天下放り出されてかたつむり 負け犬の視野はいびつに揺れていて 街角でバツタリ過去は生きている	大阪市	吐田一公
追憶のあかりが欲しい目をつむり 若い気が峠でしかと齢を知り 音たてて崩れるような女坂	長崎県	岩崎和子	政治資金受ける姿勢がワイロ生み 空出張俺だけでなく悪びれず 血税も日の丸という無駄遣い	大阪市	堀口欣一
見えすいた嘘だがやはりにくめない あなたでも心のドア開けられぬ 若やいだ気持へふっとひとり風呂	島根県	堀江百代	サングラスよく着こなした伊予絋 今にして思えば岩本栄之助 紫陽花が今年も咲いてお茶の水	大阪市	堀端三男
美しくつき合いたし距離保つ 遮断機が上らぬままの四十坂 へつらいの笑いへ目許が意に添わず	大阪市	西出英子	雨宿り恩師と出会うパチンコ屋 策立てる時間黙って小言聞く 撫で肩の男思わぬ芯があり	和歌山市	堀端三男
ふんざりがつかぬ女の花鋏 合い槌をうつたばかりに委される 多種多芸な人とつかれる人と居る	和歌山市	細川幸代	喜雨の中水口しかと踏み固め 百姓が着流しで来る喜雨休み 灯を消して妻と見ており遠花火	島根県	角耕草
赤い爪磨いて女すきだらけ ファッションの水着渚をよく歩き 割り勘で気楽な友情持ち続け	大阪市	小谷清女	代替りしたか古里赤い屋根 銀行が出来てもこちら用はなし 気が染まぬ仕事で釘を打ちそこね	大阪市	清水建司
広島市	光井みほ	七人の敵も白髪で巾が出来	浜田市	佐々木裕	

算盤をはじけば形勢不利と出る
ゆつくりと下る人生並木道

兵庫県

野々口 ゆう也

丸い背に不用のラベル貼る他人
老のあす流れのままにひそと生く
よそ様の新築値ぶみ何になる

寢屋川市

立床 晴風

絵日傘のうす着絵になる先斗町
口髭をひねる部長も裏が見え
少しずつ地球が痩せる音がする

米子市

雄賀 美世

店頭で威張った鯛が売れ残り
鉄骨に住んでも老母の丸い膝
灰皿の山に苦悩のあとが見え

大阪府

藤森 小雅子

ひとときの花の生命を風が吸う
七人の抜殻がある終電車
網棚へ男の灰汁を捨てて降り

唐津市

桑原 掬治

赤い花黒い蝶も寄って行く
片仮名の花の名前をまた忘れ
安売りが主婦の両手にぶら下り

唐津市

田口 虹汀

迷惑な達磨片目のまますわり
一歩ずつ今日も二人で上る道

ハイハイと綺麗な返事味がない

倉吉市

今村 夕路

土用波海はそろそろ素顔見せ
君ヶ代も関心薄い世の流れ
やせたいと思う女の二重あご

大阪府

野田 君枝

父の日の父はだまって生ビール
ランランを追うカンカンも年頃か
五十代歳それなりの美をたもち

米子市

野坂 なみ

魚群追う目にクナシリの霧の山
難問へ立ってひとりの骨疼く
肩越しによその不幸を覗き込み

尼崎市

中谷 利美

冗談を皮肉と聞いてからむ酒
ネタばれている漫才に興がさめ
こうなった以上女は産むつもり

出雲市

園山 多賀子

紫陽花の移り気過去は語るまい
うつむかず風にまともに生きる顔
風が吹く風が動いて人動く

豊中市

満仲 きく子

生かされていると思えば腹立たず
笛吹けば踊るわたしの阿呆ぶり
白粉のはげる心配ない素顔

岡山県 池田半仙

疑えば心に入道雲が湧き
紐足して風呂敷無理もきいてくれ
信州の豆腐の堅さ掴み上げ

名古屋市 越村枯梢

赤い靴女老いても放さない
仏具磨く先祖の心に触れながら
自叙伝を書けば書くほど罪の数

鳥取県 羽津川公乃

夕立に馳け出す若き別にもち
冷蔵庫麦茶ばかりが冷えつづけ
前列がみつけた教師の泣きぼくろ

高槻市 竹内花代子

退職をしてから曜日忘れ勝ち
涼しさを託急便で詰めてくる
妻の座があるから妻は動かない

橿原市 西本保夫

囑託のボクにも妻はついてくる
囑託の机はあっち向きこっち向き
誰も居ぬところで囑託年齢をとる

大阪市 大野武太

初耳のようにガイドにきいてみる
人がらを憎めず毒舌ききながす
駅前も故郷も他人の貌になる

米子市 桑原伊都

出発時間ずれてしらける見送り人

末っ子と語る言葉が甘くなり
吸い殻にしびれきらして待った跡

弘前市 田中叶

労資協調つまり儲けている会社
わからない拍手の中でする拍手
変電所まったく静かたんぽぽ咲く

島根県 星野侑正

ビールなら少しはよいと主治医言い
自己紹介ひとり身ですとさりげなく
千天の慈雨とならない夏期手当

大洲市 横田放人

渋滞を横目にバイク風を切り
お手洗出ると小言が待っていた
窓際は回転椅子の軋む音

米子市 青戸美佐

遠ざかる駅いつまでも母が立ち
鳥かごの広さで小鳥今日も啼き
魚ばなれさせまい小骨もとってやり

今治市 渡辺南奉

眉細く引いて男を騙そうか
帰る家あるから旅が面白い
辛抱なクモを見ているのも根気

岡山市 串田句味地

本当の事を云うのに気をつかい
まっすぐに生きたし闇をかき分けて
八十五で明治の小骨抜け切れず

大阪市 村上 田鶴子

見残した夢で裏切りしてみたし

耳たぶが薄く幸せ遠いひと

マンネリの日々で指輪を弄び

大阪市 鍛原 千里

紅うすく引いて本当の顔になり

あの人に今宵逢えそう天の川

闇の中自分をしばる鎖切る

大阪市 横山 静子

冴えた夜の窓より月の見舞客

看護婦さんにいつも心を読まれたり

ギブスの足付録のように下げ歩き

吹田市 藤原 世史春

心不全大平さんもカンカンも

犯罪も億の単位の物価高

間違いの電話に優しい余裕見せ

岸和田市 津田 千舟

優先座席誰も譲ってくれず着き

方舟に惜しい器量の娘も混り

倉敷市 大森 登竜

平静を装う煙草に火がつかず

散る事を知らない花に惑わされ

島根県 岩田 三和

おもむろに広げる扇子風おこす

大味な皿にお世辞をふりかける

倉吉市 野中 御前

子育てが終って増えた趣味の鉢

夫婦げんかかけこみ寺は妻の里

大阪市 林 ひろ子

妻の顔ばかりして花へカメラ向け

隠しても恋と知ってるカウンタ―

羽曳野市 麻野 幽玄

石投げられた犬それからはすぐに吠え

眼を開けたままの人形へする添寝

神戸市 久保 禎三

法律のがんじがらめを暴走す

無いものづくしけれど青空残ってる

東予市 小山 悠泉

七夕の童話は孫へ受け継がれ

ペンだこに哀歓がある定年期

広島県 砂田 静佳

観光の人見て歩くパトロール

山の湯に人間不信の垢落とす

尼崎市 中辻 千子

おおらかさ人と人との橋をかけ

精一ぱいに生きてる知恵はこれきしか

出雲市 石倉 芙佐子

手拍子の揃わぬ人も中に入れ

人形の夢に出て来る過去の人

和歌山県 天満 三千代

渡り鳥寒波に堪えて来た古巣

一匹の蝶へ二つの網がより

大阪市

杉本 智慧子

許されぬ妥協へ雷鳴とどろきぬ
向日葵に住む太陽の精を見た

大阪市

西村 芙佐女

獲物無くすました顔の鶴もあわれ
母のえらんだ薔薇一輪に刺はなく

大阪市

花岡 千世子

いつまでも子供でないと叱られる
来て見れば三朝の宿もビルが増え

高知県

山下 登舟

よいと巻け日焼気にする身ではなし
逢いに行く暑さいとわぬ首飾り

島根県

福岡 芳枝

一人旅通路の男気にかかり
客待ちの運転手さんもマンガずき

島根県

東原 福子

箒目も正しく女独り住む
耐えるだけ耐えてダイヤとなる光

鳥取県

武田 照子

席ゆるる気にもなれない程つかれ
内面も外面もない菜っ葉服

熊本市

北川 一進

あれこれと走り書きする思案中
ふところは他人まかせの梯子酒

島根県

岩佐 富子

聞き捨てのならぬ話が胸をうつ

上手に齡重ねましようときさようなら

尾鷲市

渡辺 伊津志

受話機取る手の素早さの刑事室
止り木で四股踏む鳩は餌を待ち

羽島市

伊藤 静枝

赤潮を嘆く漁夫への言葉なく
老眼鏡失せて読書の欲兆す

大阪市

平井 露芳

物真似で鳴いたら鶏首かしげ
アーメンも聞けずじまいで首相逝く

鳥取市

武田 帆雀

瓢箪の蔓の蛇行を又叱り
よく眠りよく食べ丈夫な妻肥り

米子市

田中 亜弥

銭太鼓はずみに慣れた音のさえ
内職の扇子張る掌で夏を呼ぶ

兵庫県

伊沢 午郎

やりくりはやっぱりうまい母ゆずり
予報官みごとはずれたつゆ晴間

兵庫県

山根 左春

ねぎらいの音楽皮肉に聞える日
胃袋へ育ち盛りは思案せず

大阪市

溝渕 美紀子

喉元で止めるゆとりを持てる蔵
心の火とす燈台我に無く

八戸市

島田 昭治

まんじゅうを二つに割って嫁姑
病人をあやす言葉を選びすぐる

兵庫県

中田白李

兄妹の兄は叱られ役をする
好きな色ことし女はなぜ変える

米子市

菅井未知

孫の旅財布に少し足してやり
町の名も武士のいとなみ俵ばせて

唐津市

木塚素石

新鮮を種に大根背負わされ
刑事殿疑うことがつとめです

唐津市

山下勝一

念仏も派閥の三途救い得ず
石炭で儲け山師の父帰る

唐津市

仁部四部

鶏の会社育ちで黄身が透け
山清水アダムとイヴの味がする

今治市

新居田胡頰子

ふしくれた手にながちりと今日の幸
山また山越えて男の汗を積み

寝屋川市

福富隆子

うそ言った口を平気でふいている
夫婦して糸通らない苦笑い

岡山県

森柳昇

朝顔のきれいな喇叭を吹く心地
親と娘の掟へ結納おさめられ

八尾市
海開き今年もフェンスの中なのか
日々新たな歴史の中に古き歌

堀内柳 柚

松原市
受験期の子を持つ家は灯が消えず
年寄の身になってみる年になり

本多洋子

青森県
美化された弔詞に仏ウロチヨロシ
真夜中に邪心起こさすネコの恋

波ただお

松江市
月末の財布無心に欠伸する
順調な恋に紫陽花真盛り

豊田巡歩

東大阪市
お互いに疲れましたと別居する
不必要な牙ではないと象いわく

三宅哲夫

兵庫県
減反に軽い音する農民車
本業がパートになった田植唄

岸田幸子

和歌山県
きっかけが欲しくて石を投げてみる
出雲市

時田誠一

大阪府
残り火を酒でかき消す夜もある
桜貝の夢も楽しい星月夜

吉岡きみえ

倉敷市
妻らしく組板の音使い馴れ

中島彩平

東大阪市

坂本喜洗

どの医者もどこが悪いか問うて診る

大阪市

山本炬斉

公約は皆口だけですかされる

大阪市

岡田ふみ

笛吹きに帰るも鉾町生れ故

大阪市

橋元美恵

乗り越しをあわてなくてもよい暮し

大阪市

内藤ますえ

信頼をしてもせんでも夫婦です

岸和田市

藪野ケイ子

シャボン玉ふうわり飛んで消え果てる

鳥取県

和井観洋

全自動のそれでもいいいたい事があり

唐津市

浜本義美

沈黙を児は最大の武器にする

岡山県

松本元江

山登りあしたの坂を夢に見た

泉佐野市

大工静子

長命を望む娘もなし憂なし

奈良県

大寛直木

太陽はいずくの場所もへだてなく

大阪市

岩田八文銭

七〇才ボケるは早い百も有る

★

名古屋市

鈴木可香

境内に御下賜の札を立てた松

から振りの半生四十の肩が落ち

減びゆくいのちの一つ朱鷺の色

老人にくしやみをさせた窓を閉め

人生に還暦という句読点

大洲市

米沢暁明

太陽がやっぱりあった梅雨があけ

インタビュウ軽く上手にとぼけられ

舞台いま名技は重い重い石

慎重を期してどしやぶり動かない

岐阜市

市川鱗魚

あすの闇に夕陽救われそうになる

押しまくる若さが朝の貨車をまつ

花の美に染ると花が話し出す

逃げ道へ真つすぐ喋る坂はない

そばの花の白さが妻の里である

東京都

池田呑歩

いけにえにされ靖国に放つとかれ

三分の理がのさばっている平和

奥の手もなく人生の土俵際

人生のためらい傷が疼く酒

考える葦に悩みが果てしない

八尾市文化祭市民川柳大会

10月12日(日)

八尾市商工会議所
三階大ホールで開催

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

水粉 千翁

座五の『白い足袋』は川柳の省略から奥行きを言い得てまことに絶妙と言えましよう。

失言の悔いにまひるの歯を磨く

八木 千代

失言の悔いは、むしろ句主の心清らかさを言い尽くされているようです。『まひるの歯を磨く』とは唸るような表現でした。

母と子で渡れぬ橋が見えてくる

高橋 夕花

母と子の絆こそ不滅の糸で結ばれています。しかし、生きとし生ける人間世界での変転極まりないものも又、母と子との間にあることをこの句が教えています。匍えば立て、立てば歩めから、学業、就職、結婚とドラマは移りかわって行きます。『渡れぬ橋が見えてくる』にそれを言わんとする作者の心が鮮烈です。特に座五の『見えてくる』にこの句の完全無欠さがうかがわれます。

あじさいの彩虚と実に疲れきり

西山 幸

実にうまい句が出たので目を張って見ます。虚と実に疲れきった人間共の何んともいことでしょう。あじさいの花と組合わせた筋の通った作品としてすばらしい佳句となっております。

香菓を数える指が愉しそう

高杉 鬼遊

ものすごい作品がとび出しましたが、私は川柳の話をするとき、必ず江戸川柳の『泣きながらよい方を取る形見分け』の句を引用します。この穿った句の心が川柳だといこ

とです。その句をそのまま現代に可とするものではありませんが、説明句氾濫の中で、文学だ、文芸だと論争もよいが、こんな句を作ることを忘れると遂には川柳の原点を失うことにもなろうかと思ひます。

ポツクリと死にたいなんて贅沢な

松本 忠三

これは一般的には老人の口から出るもののようにです。薬瓶をさげてうろろする老人さん、もう少し落ちついて下さい。私を含めてどうか正直に長生きしようではありませんか。

贅沢は犬が難産する時世

室谷 徹舟

贅沢を穿った句が続きますが、うまく時世を衝いたものだと思います。続いて微笑をさす川柳らしい作品を並べてみましょう。

とてもええお医者さんです恢復期

若宮 武雄

この句こそ川柳の心奥を突いたものでしょう。無駄な語句を省いての患者になり切った心が心憎いまでに表現されています。表現は手段に過ぎぬということをこの句から教えられるます。

覚悟せよから小康にまたあわて

井上柳五郎

まったくその通りでまわりはやりきれません。このあわて振りこそ人間の姿でしょう。

小鳥屋をちよと覗いた焼き鳥屋

西森 花梢

何んでも気になるこれも人間の姿でした。

過去を見つめてはならないのが人生哲学です。『足跡を消す風に逢う』とは正に至妙の表現と言われましよう。

忘れたいことにつまずく白い足袋

嘉数千代香

前句に通ずる『忘れたいこと』への『つまずき』に、句主は自覚反省したのでしよう。

愛染帖

橘高薫風選

島根県 小砂 白汀
 税務署へ病氣と書いて老いしかな
 姑の胸の厚さに矢がたたず
 青森市 工藤 甲吉
 悪の華萼は五弁で黄金色
 黒梓の妻に朝夕叱られる
 米子市 八木 千代
 指人形かえらぬ夢も語り出す
 古時計ゆすれば動くなつかしさ
 平田市 角 耕草
 おだやかに総蹶起すお百姓
 京都府 山本 規不風
 米価もう当てもしない田草取る
 京都府 山本 規不風
 慕われるのは少しある悪心か
 怖ろしい性を見つけた鬼あざみ
 大阪市 小出 智子
 珈琲を飲んで夫に言える人
 豆腐屋が通ってからを落着けず
 笠岡市 木山 遠二
 年金で三猿めいた日を送り
 何も見ず眼鏡かけたりはすしたり
 藤井寺市 児島 与呂志
 温泉で妻洗濯の話する
 大袈裟な話にしてる女連れ

和歌山市 西山 幸
 遠花火向うの闇はあだし野か
 迷い迷うて橘の長さに佇ちすくむ
 高知市 西川 富恵
 汗拭いて少年の意志固くなる
 和歌山市 浦野 和子
 風の日にまぼろしの花ふと見たり
 一条の愛に流れて行く螢
 大阪府 川口 弘生
 み仏の眉間に宿る螢火よ
 君を抱くそのひと時が時止る
 大阪府 川口 弘生
 人民の政治がタレント議員にし
 京都府 松川 杜的
 旅情とは営業係数に逆比例
 四季確かカレンダーにある口絵
 島根県 堀江 正朗
 お茶碗の音にいやしい欲が出て
 指先で暮しの知恵を拾いあて
 島根県 堀江 正朗
 竹踏んで明日にそなえる意気は持ち
 威勢よい孫の呼吸が受話器から
 島根県 榎原 秀子
 石蹴ってみたたら何かが石とび
 グミ一つなつかしきまま盗みたり
 川西市 戸田 古方
 夢の花ともあるときの栗の花
 手話の本取寄せてみる気にもなり
 鳥取市 河村 日満
 大空へ無職の無聊感じる日
 晩酌を時のながれの椅子で酌む
 和歌山市 松原 寿子
 大なり小なり傷があるだろ夏の背
 女にはとおい海ある走馬灯
 倉敷市 水粉 千翁
 去るものは追わず夕焼け雲に向く

今治市 月原 宵明
 白い杖の足を案じる花ざくろ
 和歌山市 若宮 武雄
 錦鯉を太らせている脱税者
 富田林市 中村 優
 悶悶に母の言葉の鈴が鳴り
 富田林市 岩田 美代
 老女三人自分の減びる日の話
 唐津市 新岡 回天子
 御札を裸で申している電話
 唐津市 桑原 掬治
 よき親父すなおな息子夏近し
 高知市 赤川 菊野
 ひとり酒独りの夜を深くする
 八尾市 高橋 夕花
 向日葵からだんだん遠くなる私
 神戸市 来住 タカ子
 友情をまだ返せないカタツムリ
 鳥取県 鈴木 村颯子
 カンカンの死よりも軽いのちなる
 旭川市 朝倉 大柏
 病む女の声にならない笑顔
 尾鷲市 渡辺 伊津志
 花びらのやがて花房まで揺れる
 鳥取市 中森 葉士人
 野良犬の尻尾から落ちた長い梅雨
 町田市 竹内 紫鏑
 飲むときは飲むさ運転手へ贈る
 島根県 岩田 三和
 こっちにも考えあつて戸を閉める
 西宮市 野呂 鶴汀
 カーテンをわざわざ閉めて覗き見る
 大阪府 欄 蘭
 省エネに慣れて来たのか口にせず
 大阪府 河野 君子

自画像を掛けると悪寒がつきまとう

兵庫県

辻

文平

遠い日の絵本に赤い彩が消え

唐津市

浜本

義美

真白になればのばしてみたい髪

鳥取県

清水

一保

安心と云うスキも与えられ

尼崎市

黒川

紫香

みな馬鹿に見え出して来て莫迦になる

名古屋

越村

枯梢

無駄花の七十年を咲きにけり

大蔵市

大野

武太

花の香もとかして雨は地にひたる

和歌山市

坂口

公子

かたばみのちっちゃな種にはじかれる

京都市

山本

桐下

カマキリの反り身にしむ恨み事

兵庫県

遠山

可住

南向く船に落陽化粧する

綾瀬市

大山

と金

勿体なや食いちらかして食いのこし

岡山県

直原

七面山

色気などもうありませんよとちゃんちゃんこ

米子市

小西

雄々

小石まで反射神経ためすよう

堺市

高橋

千万子

ふりかえる子育てほどの夢はなし

鳥取県

羽津川

公乃

脱ぎ捨ての解放感の酒に酔い

唐津市

田口

虹汀

はいはいと綺麗な返事味がない

高槻市

若柳

潮花

パトカーの突刺すように灯が走る

奈良市

森田

カズエ

年老いて友の誰かが思つて

貝塚市

行天

千代

細長く残る人生行くときめ

兵庫県

円増

貞子

合掌の顔さわやかな青年像

米子市

石垣

花子

くすくすと笑えば一人引つ掛かる

鳥取県

和井

親洋

同伴で散歩の出来るいいくらし

倉吉市

奥谷

弘朗

煩惱が喜寿の隅から覗いてる

兵庫県

野々口

ゆう也

古稀近く乱数表は捨てておく

兵庫県

中田

白李

名画展だけ観てデパート素通りす

西宮市

朝山

千世子

ほとぼりのさめた金掘る月夜かな

弘前市

田中

叶

山姥が出そうな我が家の深い森

米子市

佐伯

越子

ふくよかな頬に不服は洩らすまじ

平田市

久家

代仕男

妻と子を泣かせて馬鹿が野心抱く

今治市

矢野

佳雲

手術台生命の灯りが動いてる

河内長野市

井上

喜醉

嫁姑蘭車があい日々つらら

岸和田市

古野

ひで

増水は語らず草は土に臥す

広島県

砂田

静佳

観光に過疎の廢家が陽の目みる

米子市

桑原

伊都

牧牛の瞳に流れる白雲を

岡山市

井上

柳五郎

うたがいの十字砲火の目に刺さる

唐津市

木塚

素石

惜しげなく紫陽花を剪る梅雨晴れ間

神戸市

久保

禎三

親切を受け電車まで良く見える

大坂市

江城

修史

底辺にルール乱さず生きる道

倉敷市

中島

彩平

天国はそこ迄高層ビルの窓

唐津市

仁部

四郎

添寝する母へまどろみおすそわけ

大坂市

藤森

小雅子

人間の愚痴を神々みそなわす

羽咋市

三宅

ろ亭

誰に言わずこれだけ守るといふ誓い

岡山県

出原

敬一

生き埋めにされた蛙へ建つ校舍

宝塚市

吉田

笑女

日本に四季あり梅雨も又楽し

今治市

新居田

胡顔子

風死んで風鈴虚無の中にいる

和歌山市

津田

与史

咲き誇る花にそっぽを向く日あり

江津市

杖田

よし昭

酔いざめのコップで女の眼を盗む

室戸市

岬

風子

過去のある男の影に酔う女

出雲市

原

独仙

あの時の嘘の効用笑い合い

松江市

豊田

巡歩

十代のハンドル闇夜に鉄砲か

大坂市

白石

潔

竿すらりたつきはなにでする人ぞ

八戸市

小泉

紫峰

島根県 東原 福子

潮騒の丘若くて逝った人思ふ
西宮市 妹尾 春江

湯上りを風鈴にきく風のまち
大阪市 橋元 美恵

何もかも醒めていく目が笑わない
倉敷市 小幡 里風

救急車走る悪感が走る影法師
鳥取市 武田 帆雀

冷コーを飲みつつ隣は鉄工所
寝屋川市 宮尾 あいき

夢の中なら豪遊しても良いものを
浜田市 佐々木 裕

お叱言の一段落で耳を掻く
福山市 桑田 静子

欲しいだけ食べて肥っている平和
和歌山市 堀端 三男

ライブは変化球には乗ってこず
羽島市 伊藤 静枝

テスト中鉛筆尖り気の尖り
米子市 雄賀 美世

点滴にはさる炎も燃え続け
米子市 菅井 未知

夫の財布当てに気前のいい旅路
豊中市 満仲 きく子

サングラスかけた女のエゴイズム
米子市 野坂 なみ

手作りの四季とき夫へ花供養
熊野市 坪田 冬花

虫の息をどうもしてやれない俺
大阪市 清水 健司

ガチャガチャと腹を立ててる流し台
唐津市 浜本 久仁於

責任がないから云える時事放談
羽曳野市 麻野 幽玄

膝小僧抱いて眠れば亡母の夢
出雲市 高橋 可保留

恵まれているのでないが簞の鳥
岡山県 嘉数 千代香

正義の味方風は天から地から吹く
寝屋川市 江口 度

近頃の女たしかにひげがある
和歌山市 湯川 頼次

見舞客みな健やかな顔に見え
寝屋川市 柴田 英壬子

子育てを知らぬ女の古いドゲ
島根県 榊 みどり

喪があけた夜空に光る亡父の星
大阪市 小谷 清女

過信した海で自分を知るボート
和歌山市 内芝 としよ

パン食と外語に馴れて日々平和
京都市 都倉 求芽

血管へ阿吽合わせぬ注射針
倉敷市 田垣 方大

騙されて絡めた指が痛み出し
大阪市 土屋 雅洋

胃袋にものがつかえる悲しい日
兵庫県 奥野 テル

水枕母は不眠も苦にならず
唐津市 山下 勝一

吹けば飛ぶチンピラまでが覆面し
岡山県 岩道 博友

暮し向き変って老いの独り愚痴
岡山県 稲岡 正之

弱点を突けば素顔が軋け出る
倉敷市 藤井 春日

赤電話早う済ませと咳払い
米子市 青戸 美佐

法話きくひと時自我も消してくれ

山口県 高崎 喜一

未来への夢を抱かず入園日
唐津市 岩崎 実

ダブル選挙偶然性を待つ候補
島根県 大野 醉夢

優勝馬栗毛に億の汗光る
島根県 木村 はじめ

一億円寄付をする人拾う人
東大阪市 竹中 綾珠

新首相古老の指図で動く木偶
倉吉市 今村 夕路

つながりをつけてセールのスやつて来る
青森県 五十嵐 操史

老人の人氣酒好き踊り好き
今治市 越智 一水

焼けている砂太陽に答えてる
出雲市 高見 鐘堂

どんじりの子をはげましている仲間
大阪市 朝倉 利義

定年に妻の感謝も一カ月
八戸市 島田 昭治

病人に将棋勝たせて嬉ばれ
岸和田市 原 さよ子

受験生大きな夢ある予定表
島根県 板垣 夢酔

子を五人育てた程には報わらず
東海市 小山 悠泉

長男が迷わず農を継いでくれ
東大阪市 三宅 哲夫

さて蓋を開けてがっかり社公民
岡山市 串田 句味地

聊かな権利番犬なみに吠え
和歌山県 時田 誠一

惚れ合うにつれて喧嘩の多くなり

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

小島蘭幸

岩まさか水に嘯まれるとは知らず

森田 熊生

一滴一滴の水は、長い長い歳月をかけて、大きな岩の形さへ変えてしまふ。この句は、人間だって油断していると大変なことになる。ますよと、忠告しているようだ。

水盗む上を夜汽車が通りすぎ

角 耕三

まっ暗な田ん圃へ来たけれど、僅かしかない溜め池の水を自分の田にだけ引くのは些か気がひける。しかし生活のためには……よしやるか！——その時である。ゴーガタンガタン、ガタン……夜汽車の窓は明るい。乗客の一人一人の表情まで見える。楽しそうである。ああ、今の自分は何をしているのであろうか？自分さえ良ければそれでいいのだろうか？皆んなの水ではないか——夜汽車が通り過ぎて行く。

失職へ働く妻の靴磨く

有働 芳仙

男が職を失う事程淋しいことはない。又、妻の靴を磨いている男を想像すると寒気すら感じるのだが、この句からは淋しさを通り越してむしろ微笑まじさが伝わってくる。きつと仲の良い夫婦なのだろう。

年金で畳替えなどできはせぬ

中田 白李

退職金で家は建てたし、子供達もそれぞれ片付いて、可愛い孫もいる。四十年もコツコツ働いてきたお蔭で、ささやかだけれど年金もいくらか貰えるようになった。——ところがである。物価はどんどん上がるし、孫にオモチャの一つも買ってやりたい。老夫婦には食べるだけで精一杯なのである。

故里につづくレールのそばに住み

高杉 千歩

列車にとび乗ればいつでも帰れる故里。レールのそばに住んでいると、妙な安心感のようなものが生まれてくる。作者はきつと、心優しいひとなのだろう。

真清水も流れ止めれば腐り出す

岸本豊平次

どんなきれいな水でも、流れていけばこそである。流れを止めれば、立ち所に腐ってしまふとは恐ろしいことだ。が、人間もまた然り。

夫婦のバズルやつと形になつて来た

鍛原 千里

百パーセント、わかり合つてる夫婦なんてあり得ないことだ。又、あつたとしても、味も素っ気もないだろう。ケンカしたり、助け合つたりして夫婦の絆は太くなるのだ。

合せ鏡の間で女の夢が翔ぶ

村上田鶴子

女は幾つになつても夢を見る。この女性には、いったいどんな夢を見ているのだろうかと思像するだけで楽しくなつてくのではないか。翔んでる女がもてはやされている昨今、夢だけ翔ばしている女も可愛いものである。

仁王像後姿の哀れなる

辻 式

仁王は仏法を守る二人の神である。寺の門の両脇で、カッと目を見開いた筋骨隆々の仁王像には、どこからでもかかつて来いといった力強さがあり、勢いがある。反面、その後姿はどうであらうか？隙だらけではないか？それが哀れであると、作者の目に映つたのだ。ふつと、仁王像は、自分自身ではないかと思わせられる句だ。

ひとすじの人の道にも信号機

中森葉士人

ガシガシ動いてばかりいないで、少しは、休みなさい。生活に余裕をとこの句は訴える。

・ 同 人 名 簿 ・

その後変更になった分

一分間の柳論

江口 度

柳歴の浅い小生が、みみずの戯言をのべます。一般に苦勞なしに育った柳人は素直で純粹な句を、苦勞して苦勞して育った柳人は深みのある句を発表されているように思われる。而し句が上手になって同じような句風の人々が集まり、特異なグループを結成し天狗になり勝ちだが所詮その中の一人が名を残し他の大多数は川柳界から消えていく運命にあるように思われる。詩も俳句も川柳も全て孤独の文学で孤独は家庭の幸から遠いものと思う。

定年までの幸というのは家庭が朗かで、大勢の人と楽しく付合っていく中にあると信じていますので、川柳は趣味程度に続けていきたいと思って居ります。あくまでも生きていく内は幸でありたい、従って小生には石川啄木は不幸な生涯を送ったと考えます。まず本職が大事、主婦は主人の反対を押切って句会に出ないように、句作が重荷にならないように、大勢の柳人から遊離しないように幸な人生と共に川柳を楽しみましょう。

- ▽飯田 悦郎―八尾市弓削町二丁目一四一
- ▽飯塚 虎秋―死去
- ▽出原 敬一―(電話08695・4・13 48番)
- ▽江城 修史―〒544大阪市生野区勝山南4丁目13―1

- ▽大森 煥句楽―死去
- ▽大山 和金―〒252神奈川県綾瀬市上土棚512―27 (電話0467・76・5287番)
- ▽岡崎 祥月―休会
- ▽岡田 拳法―住居番号・32―3
- ▽落合 思月―退会
- ▽景山 綾美―退会
- ▽櫻谷 寿馬―西野7丁目98
- ▽清野 こう―(電話0724・39・06 48番)
- ▽黒川 紫香―(電話06・431・212 3番)
- ▽桑原 道夫―〒596岸和田市土生町13 03―12

- ▽高津 徹也―退会
- ▽小谷 仙山―田井二丁目27―19
- ▽小西 雄々―(電話溝口08596・2・1520番)
- ▽佐々木 静泉―卯垣二丁目312
- ▽島居 白宗―百酒改め
- ▽島田 雄峯―東京都大田区南馬込5丁目43―13 KKベッセル内
- ▽柴田 英壬子―恵美子改め
- ▽関 美子―退会
- ▽高橋 可保留―塩冶有原町4丁目29
- ▽高橋 鬼焼―〒724東広島市西条町寺西5808 (電話3・2496番)
- ▽高橋 夕花―東山本町3丁目3―10
- ▽田中 狂二―死去



垂井 千寿子

雅号ぶつちやけばなし (191)

ちずこ

たるい

千寿子は本名です。読み方は同じでも寿を使った名はめずらしいので、そのまま雅号にしました。私は一男四女の末子ですが私が嫁いで二年目に亡くなった父は、子煩悩できつちりした気性で、四人目の女の子の名前でも、当時としてはハイカラで字も凝り戸籍謄本にはチズコと振り仮名もつけてあります。

せつかく凝った、目出たい名をつけてもらいながら身体も弱く、名前負けの不肖の子である自分を、おりにふれ、父にすまなく思いながらも、偉くなれずとも平凡な辛を味わっているのを、あの世から良かったなあ、と言ってくれているように思っています。

(五十四歳・主婦)

- ▽田中 笑風—(電話07747・2・6472番)
- ▽垂井千寿子—小松原6丁目1—55
- ▽津田 与史—築港4—7
- ▽恒松 町紅—雑賀町1686(電話24・5450番)
- ▽津守 柳伸—柳信改め
- ▽藤後 実男—³679—21兵庫県神崎郡香寺町大飼家川原野871—8
- ▽西 いわを—死去
- ▽西尾 栗—八尾木2丁目135
- ▽西川 善紫—誓二改め
- ▽西出 一栄—死去
- ▽西山 幸—(電話0734・24・1576番)

- ▽河内 月子—野坂つき子改め(住居は河内天笑方)
- ▽野呂 右近—大久保町2—187(電話902・5599番)
- ▽羽田 一扇—宮路地住宅一棟303
- ▽羽原 静歩—¹¹572—守口市外島町2—11コスモハイスト守口205(電話06・9996・2338番)
- ▽伏見 茂美—石津町4丁目6—6
- ▽藤村 亜成—²⁰572—寝屋川市三井ガ丘3丁目五番七—1〇二(電話0720・233・7571番)
- ▽藤村 女—(電話0798・73・6579番)
- ▽松下 梁水—⁷713—倉敷市玉島柏島光町柏島団地49号(電話0865249番)

- ★編集部へのご用件は 〒544大阪生野区勝山南一丁目14—17 不二田一三夫(電話06・718・3218番)
- ▽松田宇宙太—退会
- ▽松本 昌—退会
- ▽宮本 茂児—⁵980—仙台中山8—13—5丸紅中山莊304
- ▽村上 春巳—⁵636—03奈良県磯城郡三宅町但島324(電話07455・7・2473番)
- ▽森 寿風—死去
- ▽森田カズエ—²631—奈良市西大寺野神町2丁目7—2(電話0742・44・9000番)
- ▽八木摩太郎—死去
- ▽行吉 照路—岡山市久米392—8(電話0862・43・7525)
- ▽吉岡 通児—休会
- ▽吉野 富江—死去
- ▽若林 草右—死去
- ▽若柳 潮花—公団36—304
- ▽渡辺 暁重—退会
- ▽渡辺 貴石—苦行改め
- ▽高鷲 亜鈍—(藤村青一)—⁵572—寝屋川市三井ガ丘3丁目5番7—102(電話0720・23・7571番)
- (55年8月現在)

空

梅本登美也選

原句と三才の雅号紛失、おわび申しあげます
(選者)
三才の雅号、お知らせください (編集部)

空模様氣にして嫁の荷をせかし 青丹子
旅立ちの心迷わす秋の空 ひとり
大空に道をつくって定期便 一路
昏れ残る空へ夫婦は妥協する 雲
長雨にビニールハウス空を恋ひ 美暗
青空を帽子が泳ぐトンボ釣り 邦穂
空の広さへ私も翼はしくなる 穂
決心がついて見上げる青い空 胡顔子
ふるさとの空が恋しい夕焼ける 木魚
空と海あの水平線に夢を追う 夢酔
果しなき空果しなき夢がある 七面山
左遷の地こんな青い空がある 素身郎
しやばん玉あどけない夢空へとび ひで
囲まれたビルの透き間に青い空 健司
星空に語りかけた良い便り 一進
抱きあげた子は太空へ手をひろげ 方大
少年が見上げる空に雲はない 三和
この空の続く彼方に父母在わす 富志子
星降る夜あれが父星これが母 柳子
梅雨空を睨む商魂夏の陣 軒太楼
空に手を合す誇りを母はもち 文平
思い出が夕焼け空から降ってくる 芳枝
傘持って出よか出まいか空模様 秀子

戦盲の兄に日本の青い空 カズエ
今日もまた雨かと空へつく吐息 天彦
空の星数えて鍵っ子母を待ち どんたく
遠足をあきらめさせた空模様 悠泉
青い空一人占めしてひばり鳴く 可住
独房の夜にきらめく空がない 代仕男
あかとんぼお宿は遠い西の空 四郎
水争いする水もなく空灼ける はじめ
まじないに傘持って出る空模様 弘朗
地下街の噴水空の彩知らず 規不風
梅雨空と別れの雷派手に鳴る 巡歩
空模様仰いで孫を送り出す 多賀子
列島の空を覆った黒い霧 酔夢
大空を飛びたい夢を子に託す 掬治
この空を二度と原爆許すまい 勝一
満月の空と一対の琴が鳴る 越子
流れ雲わたしに癒えぬ傷がある 千代香
タイプ打つ窓から青い空が呼ぶ 春日
大空を茜に染めて陽は沈み 八文銭

佳
寝ころべば二人にだけの空がある 大柏
船乗りの妻になり切り空を見る 耕草
蒼い空老いの日程白いまま ゆう也
青空のまぶしき夜警になって知り 花子
被災地に空から届く贈り物 御前

人
雲走る空へ飛びたい鯨の夢
富士ひとつ画けば日本の空となり
地の天
日の丸が一番好きな青い空

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百円

予定表

林野甦光選

軸
揚げひばり空は高さを誇らない

予定表 三重丸は子の帰省 夢酔
嫁が来てはかどる野良の予定表 みどり
予定表 哀れ団体雨を発ち 邦穂
予定表 病氣割り込む隙間なし 美穂
現実と大きく違う予定表 保夫
予定表 秘書が鉢をふと案じ 登美也
約束へまた予定表 繰る女 七面山
予定表 きつちり書いて病んでいる カズエ
夏枯れへ出費が狂う予定表 勝美
休日の予定に無駄のない禅寺 代仕男
スケジュール通りに行つて物足らず 胡顔子
予定表 書き終え透けるワイン持つ 越子
予定表 に乗せた訪問見落され 春日
人生に遺言と云う予定表 裕

予定表に書けない予定もたまにある

生甲斐の意欲はハードスケジュール

予定表また書き直す資金繰り

二日目にもう削られた予定表

頭文字だけは秘密の予定表

予定表きっちり夜行の隅にいる

叱る役叱られる役予定表

予定表の符読秘書は知っている

ライバルの裏をかく気の予定表

予定表予定等により書き入る

三泊四日三月前より書き入る

予定表ちゃんと組んでる時は燃え

スタミナの配分もして予定表

予定表ギッシリ詰り時の人

逃げておく口実がある予定表

春闘の谷間へ旅の予定表

予定表無事に済ませた今日を消し

予定表上司赤字を入れたがり

予定表追って流転する人生

記入もれ呼出しが来た予定表

予定表にない日曜の着い空

予定表ノルマの鞭が追っかける

予定表浮世の義理が詰ってる

予定表人生哀歓神がつくった予定表

予定表次の手は打ってあります予定表

予定表子に流す汗惜しまない

若者の時に無謀な予定表

肩すかし

奥谷弘朗選

見くびった奴から喰った肩すかし

読む程に推理小説肩すかし

肩すかし食った男の苦が笑い

エンゲージリングあつさり戻し翔ぶ女

自惚れがまたまた食った肩すかし

取立てに行けば転居のピラが待ち

横綱が不覚を取った肩すかし

肩入れのあげくに食った肩すかし

うますぎる話しにのると肩すかし

肩すかし失敗窮地に立たされる

裏の裏かいで見事な肩すかし

なまじつか信じてた為の肩すかし

肩すかし食った明日のある若さ

肩すかし巨体朽ち木のように落ち

保革逆転圧勝をして肩すかし

肩すかし鬼と酒くむ酔える日に

打合せ出来てたような肩すかし

肩すかしされても孫の帽子編む

踏み込めば星は見事に肩すかし

虎の威を肩をすかして見せる意地

肩すかししても気付かぬ四月馬鹿

賈金を置いて張り込み見破られ

気負い過ぎうまきはまった肩すかし

肩すかし食わない釘をさしておき

肩すかし許さぬ眼で孫は問い

後味じが悪い勝負の肩すかし

肩すかし重なり母を居直らせ

肩すかしただ一言が生む波紋

受け太刀になつてもくろむ肩すかし

それが肩すかしいもんと叩かれる

肩すかし憎い男のテクニク

肩すかしして野良猫が逃げて行く

柳腰ひねって食わす肩すかし

土壇場でまんまと嵌った肩すかし

警戒の裏に裏ある肩すかし

とび上る蛙へ柳肩すかし

肩すかし昨日の塔がゆれている

不様でも勝たねばならぬ肩すかし

虎の威を肩をすかして見せる意地

肩すかししても気付かぬ四月馬鹿

賈金を置いて張り込み見破られ

気負い過ぎうまきはまった肩すかし

肩すかし食わない釘をさしておき

肩すかし許さぬ眼で孫は問い

後味じが悪い勝負の肩すかし

初歩教室

題 — 舞 —

本田恵二朗

ここに千人の川柳人がおれば、千種類の性格があるはずである。それは借りものではなくて完全に自分のものである。自分のものであるなれば、常日頃それを磨いたり、整えたりして、健康管理をおこたつてはなるまい。我々は数万という過去を根気よく積み重ねて来たその上に現在の自分が存在するのだからそれぞれの性格も時代と共に改良したり、進展して、円熟したにちがいない。そこで、とらえる句材も句境も、そして描写力も変転し好転しはずであり、またそうあらねばならないと私は思う。

転手古舞してて用事抄らず

(転手古舞の汗ほど用事抄らず)

御神楽を舞う巫女達の厳肅さ

(かぐら舞う巫女の表情人形めく)

鶴の舞う里旅立ちの地を選び

(鶴の舞う里に憧れ旅プラン)

(旅プラン鶴舞う里に憧れて)

ゆう也

智津子

方子

行水のひとへ病葉舞うて落つ

(行水の肌へわくら葉慕い舞う)

老いてなおさん然とした舞の袖

(金屏風差す手引く手のかくしやくと)

(かくしやくと差す手引く手のあてやかさ)

後見という舞台裏の持つ至芸

(後見の巧みなりードへ舞台生き)

舞い散った花野仏の春の色

(花吹雪野仏さまを慕い舞う)

座布団が舞うてヒイキのチーム散る

(玉碎のヒイキへ座布団舞い上る)

神に手を委ねひたすら今日を舞う

高い高い空で舞う鳥僕の夢

(空高く舞う鳥の夢僕の夢)

舞う如く華美を求めて生きる女

(女あわれ華美を求めて舞い続け)

脚光を浴びる舞台で裏で泣き

(脚光の舞台かたしり過去を秘め)

国宝の舞にうつと足さばき

(国宝の舞が古代を偲はせる)

目に見えぬイモチの菌が夜空舞う

しみじみと虫干の日の舞扇

百日紅咲いて路地にも蝶が舞い

(蝶が舞う舞う路地咲きを見逃さず)

舞い降りる意は狙いを遠くない

(舞い降りる意は狙いを遠くない)

舞い納め白足袋を脱ぐ心地よまた

(舞い納め白足袋にしみこむ満足感)

能舞台小鼓が折目つけている

(舞い納め白足袋にしみこむ満足感)

福子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

きりきり舞追われる仕事する感謝

(きりきり舞いさせる仕事へ感謝する)

ほのぼのと野立の蘆へ落葉舞う

舞知らぬ椿が落ちる一直線

(舞うすべを知らずと椿落ち)

勝利に酔って舞う友有難し

(優勝旗乱舞の友に取巻かれ)

夕陽浴びかもめ舞うてる古里は

(郷愁の臉の裏でかもめ舞う)

獅子舞の笛の音も冴え秋祭り

(獅子舞の笛がもてくる秋祭り)

蝶一羽嬉々と舞わせて梅雨晴れる

無に還えるわくら葉しばし風に舞う

夢も失せ風に舞うてる宝くじ

(宝くじ夢失せはてて風に舞う)

寿ぎの舞に披露も盛り上り

(舞扇披露の宴を盛り上げ)

即席の童話へ蜚舞い飛はす

舞い戻る孫の足音忘れ物

(忘れものらしいな孫が舞い戻る)

庭の花見つけ和服の裾あおき

舞う風が慣れぬ和服の裾あおき

(にくらしい風が和服の裾あおき)

残念無念車券こなごな空に舞う

舞うような手振りて美女のよく喋り

伝統を守って老女の地唄舞う

(地唄舞う老女伝統をしんと踏む)

舞う蝶へ媚びる雄花の下心

出直しの天手古舞に絞られる

(出直しの天手古舞を喰う腰)

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

ゆうゆうと過疎の緑へ鶯が舞う
 惜春の花のいのちへ舞う風よ
 風に舞うわくら葉ゆうゆう地にかえる
 舞扇とれば老妓の独壇場
 (舞扇さすが老妓の年期振り)
 バラの香にトゲ気づかずには蝶は舞う
 (バラの香に酔いしれて舞う恋の蝶)
 紙吹雪舞わせて長い飛行雲
 舞い込んだ朗報朝の夢破る
 新装開店ほこりと共に舞う
 (新装開店嬉しいはこり舞い上げる)
 ジャンボくじ夢を舞わせただけのこと
 前身を聞かず優雅な舞に酔う
 (前身はどうあれ優雅に舞い納め)
 道楽のお名残りらしい舞扇
 梅雨晴れの天主に高く鶯が舞う
 (梅雨晴れの天主に媚びて鶯が舞う)
 動かない舞一さしに命こめ
 (一さしに命をこめる不動の舞)
 舞妓はんの姿が見える先斗町
 終章を静かに舞うて日陰花
 シヤン玉のいのち短かく舞い納め
 吊皮が派手に舞うて過疎のバス
 グリン車はまばら煙草の煙が舞う
 (紫煙の輪舞うてグリン車はまばら)
 舞を舞う国宝八十余とは見えぬ腰
 (舞扇持てば八十路の腰がのび)
 舞い上る噴煙いのちある如く

小雅子 同 武太
 貞子 同 健司
 芳枝 同 大鷹
 美佐 同 寿子
 可保留 同 八文銭
 同 同

雑踏をタンクトップが舞うて行く
 条件の良い方向に舞うてみる
 (条件はどっちが良いか舞うてみる)
 台所きりきり舞いの嬉しい日
 若い頃親を泣かせた舞扇
 舞扇色香ちらちら裾さばき
 てんでこ舞させて一人娘の晴れ姿
 惜しまれて塚の舞姫昇天す
 光化学の空では鶯も輪に舞えず
 いにしえのロマンを秘めた京の舞
 逢える日の心は宙に舞うている
 中断の野球ヘテープが乱舞する
 フットライト浴びてお転婆の男舞い
 幻の天女を見たり蝶の舞い
 黒田節舞うて門出へ花を添え
 力学を心得え銭で闇を舞う
 舞扇たたみしまに定退す
 もう舞わぬビエロ退職金が無い
 風に致う枯葉にも似た老い独り
 舞うているうちは無難な夫婦独楽
 蜚舞うきれいな空に浄土見る
 独り舞う真白き足袋に業を秘め
 舞扇涙のしきも閉じてある
 葬列の音なき空に鶯が舞う

英子 同 慶彦
 同 同 瓢太
 同 同 佐代子
 同 同 保夫
 同 同 胡顔子
 同 同 帆雀
 同 同 利美
 同 同 露杖

題「無駄」9月20日締切(十一月号発表)
 宛先 下七一 岡山県倉敷市下津井一〇九
 本田恵二朗

あなたの諷刺が日本を変える
 時代の要求にこたえて創刊！ 投稿募集
 隔月刊 川柳時代

定価一〇〇〇円 叢文社刊
 A5判180頁

■雑誌「川柳時代」は目ざす

①凝結された市民の英知を

文明の改革矯正に

常に冷静な市民の眼は「理くつを越えて、ものごとの本質を見抜く。到底だまされぬものでないことを知らない指導者は失格である。川柳は市民の眼が洞察した「英知の凝結」である。この英知を結果して文明の誤りを矯正改革する力としたい。

②川柳人口を拡大して

民主主義の防波堤に

川柳は王政下の民衆が生みだした文化である。支配者に向って放つ批判の矢弾であった。民主主義と川柳の根底は一致する。川柳人口の拡大は、民主主義の強化に通じる。

③頭の体操、頭の老化防止に

本質を深く洞察し、限られた文字で諷刺する頭脳労働は、人間の頭を鋭利なものにする。川柳が頭の老化を防いでくれるのか、川柳人には健康長寿者が不思議と多い。

東京都千代田区猿樂町一四久松ビル
 電話 東京 (三三)五五〇一五九四
 振替口座 東京九一四二七一四番

大 萬 川 柳

「習 慣」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 三百四十四 句

入 選 三 十 六 句

習慣を誇る格と京訛り

慣ににくらしの知恵が秘めてある

富田林 花 梢

しきたりが古い女にしてしまふ

大 阪 好 一

習慣を疎々と受けつき村は過疎

岡 山 千代香

習慣の壁を拳で突く若さ

倉 吉 弘 朗

習慣がいつか家風として継がれ

八 尾 夕 花

習慣の電話が途絶え恋褪せる

和歌山 三 男

過疎化する故郷習慣だけ残り

和歌山 和 子

習慣の身替り埴輪の瞳は静か

和歌山 武 雄

嫁いでも実家の習慣抜け切れず

倉 敷 春 日

鳥 取 洋 々
習慣の揉み手が社長まだ抜けず

和歌山 幸 代

習慣のように通院くり返し

波風を立てず習慣に合わしとく

兵 庫 忠 夫

愛があるから習慣へ素直なり

習慣と情性で過す一週間

大 阪 公 一

商売の愛想笑いも性となり

やりくりも習慣となる物価高

大 阪 道 子

祖母がいて盆提灯の灯は消さず

習慣に溶けて姑と手をつなぐ

大 阪 武 太

前例という習慣の式次第

習慣を聞いて仲人引き受ける

佳 句

八 尾 夕 花

習慣に染って嫁の座がまるい

大 田 軒太楼

しきたりの根強き家紋に生き残り

神 戸 どんたく

習慣が定退とび起きさせる朝

倉 敷 素身郎

狭い日本習慣こんなにも違い

奈 良 カズエ

習慣という抜け道のある汚職

人ノ句

富田林 花 梢

しきたりの中に女を埋めている

地ノ句

大 阪 好 一

習慣の虚礼が重い嫁仕度

天ノ句

和歌山 和 子

朝夕のリズム妻として母として

選者吟

習慣になっても初心忘れまい

昭和五十五年度

ベストテン（七月現在）

一 花 梢

二 好 一

三 和 子

四 寿 子

五 夕 花

六 道 子

七 雄 々

八	武雄	九、〇	和歌山	一三	吐来	八、〇	羽曳野	昭和五十五年度第十回	締切 十月二十五日
九	一二三	九、〇	堺	一四	白宗	七、五	西宮	「ほどほど」三句以内	
一〇	右近	八、五	守口	一五	弘生	七、五	大阪	締切 九月二十五日	投句先
一一	度	八、五	寝屋川					以下略	第十一回
一二	頼次	八、五	和歌山					「ひと息」三句以内	

川柳塔賞中間発表追加

戸田古方

小鉢の切つ先哀しいまでに切れ
ひとり飲む酒ひとり酔うべししやばん玉

たとう紙の中で切り札温める

すがかつこ
小谷 葉子

芋掘れば僕そっくりの顔も出る

有働 芳仙

窓際で天職ってなんだろう

清水 健司

もう一人の私がいればぬりつぶす

橋本 美恵

生きた唄木を切る音も仲間なり

岩田 三和

太陽の恵みに麻葉の音が育つ

中森葉士人

かなしい木魚愉快な音たてる

田中 叶

明日に死が見えても今は生きている
時田 誠一

川柳塔社常任理事会（8月4日）

冷夏とはいえ夏は夏である。やはり暑い。

川柳塔の句風について、新人を獲得するには難解な句が多すぎるという投書があった。一部の若手作家にしてみればこの意見とは逆の場合もあるだろう。こうした悩みはこの柳社にもあることと思う。

二賞選考委員の戸田古方氏の入院などで、この際来年度から若手選考委員起用の案が出た。9月27日に催される松江市の同人総会で検討されることになろう。

中間発表は戸田古方氏の分が遅れて着いたのでこのページに発表。

西尾葉副主幹が、あと数日に迫った第16回水府忌“へ一人でも多く出席するように、と呼びかけ、例の情熱ぶりを示される（本社同人が二十四名、購読者も多数、少くも本社関係出席は三十名を越した）。

9月27日に松江市で開かれる同人総会も某氏の熱意で盛会になることと思う。

多久志氏案の合本の見本が届き、一人でも

多く希望者を募ることに満場一致した。
出席 水客・太茂津・栗・形水・紫香・潮花・与呂志・生々庵・萬的・薫風・好郎・柳宏子・小松園・岳人・一三夫（敬称略）

YFC会員募集・初心者歓迎

▼本年二月から梅田阪急ファイブ八階・オレンジルームで開られていた川柳セミナー、「生々庵川柳行脚」の会員を募集している。会費千円。毎月第三火曜日の午後一時半から三時半まで。初心者をおすすめください。

第四回 全日本川柳大会

大会賞受賞記念に

金一封

佐伯越子さんからいただきました。

川柳塔社

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼八月六日(水) 大阪市立労働会館に於て、番傘川柳本社主催の第十六回水府忌が百三十三名の参加を得て盛會に催された。川柳塔社から中島生々庵主幹が宿題「流れ」の選者として出席した。当日本社から、某・好郎・薫風・形水・水客・紫香・潮花・雀踊子・萬的・柳宏子・与呂志・弘生・凡九郎・醉々・弥生・善紫・三十四・鎮彦・みずは・幸生・糸葉・美乙女・鬼遊の本社同人24名が参加した。なお、当日の岸本吟一氏の「父としての水府」は聴衆に大きな感銘を与えた。

(鬼遊記者)

▼沢車楽喜寿祝賀大山登攀10周年記念川柳大会が10月12日午前11時から米子市皆生・皆生温泉会館大会議室で開催。本社から河村日満氏が選者として出席する。題と選者／幅・いさむ／電

氣・万彩郎／川・午朗／峠・白虎／よろこび・恭太／Uターン・恵美子／車・英比古／神・飛鳥／咲く・日満／めぐる・車楽、各題2句午後1時締切／会費千円／懇親宴二千円／投句料六百円／9月10日締切／宿泊五千円程度／申込みのこと／投句先〒683米子郵便局私書箱69号／主催・大山番傘川柳会。

▼泉民川柳大会作品募集／資格・兵庫県内在住者または在勤者／作品・一人一句／規定ハガキ使用／宛先〒650神戸市生田区下山手通4-57泉民会館内・兵庫県文化協会泉民川柳大会係／8月31日締切／選者として本社から植村客遊子氏出席／入選発表会は10月26日午後一時／会場・宝塚ベガ・ホール(宝塚市清荒神駅下車徒歩スグ／講演・京都伸夫氏／兼題／園・千津子選／踊る・爽介選／会費五百円。

▼第15回川柳天守閣のカニすき句会が11月16日1時30分、豊岡市瀬戸日和山温泉(乙姫荘)大広間で開催される。詳細は〒5700守口市豊秀町一―一九久保田以兆氏へ。

▼大型柳誌「川柳時代」が七月に創刊一号を出した。(P51参照)

▼川柳公論は五周年記念特輯号一四八頁を発行。「特別エッセイ・伝統川柳が難解となる日」を東野大八氏が執筆、その他の全国代表作家自選作品集」には本社関係・生々庵・大八・緑之助・太茂津・某・薫風・醉夢諸氏。

▼時の川柳六月号に橘高薫風氏の受賞記念川柳大会当日の講演要旨が再録された。「川柳新聞7月5日号」に、「標語が川柳に近づいた」と題して、さる4月26日テレビ朝日の生中継ワイド・サタデーで作家阿部牧郎氏と漫才作家でもある不二田一三夫氏(川柳塔編集)の対談が弓削川柳社から放映された。(不二田一三夫氏は標語作家としても著名である)

▼7月20日故田中辰二先生の門下生20名で鳴鳳思句会(主宰田中美喜子女士)を開催。その節川柳塔を紹介しました。数名は獲得出来ると思います。有働芳仙(芳仙氏は不朽洞会会員・本社同人であつた人)▽同人の動向△

ざんしよ

おみまい

む子の花客
さいの潮紫水
い溪萬柳川本
田白萬柳川本
菊辻阿若黒正

55年度川柳塔社

同人総会

松江市で開催!

とき 55年9月27日・3時 同人総会

9月27日大阪長堀橋第3ゲート、日本交通バス(トイレ付)8時集合、8時10分発車、15時松江に着。昼食はバス中、各自持参。費用約二万円。窓口・鬼遊・岳人。(一人でも多くご参加を)

▼戸田古方氏（川西市）は

8月11日に手術されるそう

だが、8月6日生々庵主幹

ほかが同氏を見舞われた。

―大阪市東成区中道一丁目

二―成人病センター七階

南病棟七六八室。

▼菊沢小松園氏（大阪市）

から―長男、三女の家を巡

回して久しぶりに東京へ行

つてきました。有名人レン

ト達の豪邸には驚きました。

司葉子・勝新・稲垣浩等々

―新宿にむかしの東京見つ

からず―小松園。

▼森田布堂氏（鳥取県）の

句碑建立・還暦祝賀記念川

柳大会号。なごさ。が赤碕

川柳会から発行された。

▼川柳わかやま吟社の10周

年記念大会が和歌の浦共済

会館で七月十三日に催され

たが八七氏の盛会だった。

▼河内天笑氏（堺市）は故

摩太郎の堺川柳会を継ぎ再

建に努力されている。

▼故飯塚虎秋氏（出雲市）

の追善句会が八月十日午後

二時から多伎町公民館で修

された。主催いずも川柳会。

雨で危険のため高山の宿に

着きました。―夏山の恐い

顔を見て帰る―新之助。

▼板尾岳人氏（富田林市）

から―槍岳山荘・槍沢小屋

・上高地のスタンブ入りの

暑中見舞い拝受。

▽9月の句会△

▼菜の花句会は十日（水）

夕六時から西郷会館（八尾

神社境内）近鉄大阪線八尾

下車西南歩約三分。会費三

百円。兼題及び選者・作家

（采）古都（酔々）あやし

い（未定）応援（未定）。

席題二題（兼、席とも各題

三句以内。投句・郵券百円

同封。切は前日到着分限

り。投句先千581八尾市

高安町北一丁目二五大路美

幸宛。

▼南海川柳句会は十八日

午後六時から南海電鉄本社

食堂内で開催。題／共倒れ

／占い／慢性。

▼大阪川柳句会は二十日午

後六時から松崎町三丁目大

萬で開催。題は／欲得／ど

さくさ／訪れ／胸。

新 同 人 紹 介

栗

林

光

夫

―亜鈍・薫風・博泉・推薦

ところ 松江温泉・神の湯

▼同人総会は午後3時。（同人総会の案内状は出しませんが、議事は出席者によって採決させていただきます）

▼式次第―司会―開会の辞―挨拶―中島生々庵―議事①会計報告―若本多久志、事業経過報告―西尾栗④質疑応答―閉会の辞

句会 4時30分

柳話 川柳塔社副理事長 川村 好郎
兼題「橋」 川柳わかやま 代表 野村 太茂津選

「活作り」 川柳塔社副主幹 西尾 栗選
「漁火」 川柳塔社同人 宮西 弥生選

「縁結び」 島根県川柳作家 河村 日満選
「出雲弁」 いずも 協会会長 緑之助 選

（席題なし・各題三句以内）投句拝辞

会費 五百円（同人でなくとも句会へご出席く

ださい）
懇親宴 二千円（六時からです。どなたでもご

参加ください）
解散 七時三十分

宿泊料 六千円

―二十八日―
市内観光 小泉八雲旧居―松江城―風土記の丘―足立美術館など。

本社八月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

神も省エネに心動かされてか、冷夏というお中元をくださる。

会場の向いの「吉野屋」の話が出たり、さすがに川柳人らしい苦労性である。

さて会場は六三名、今年は例年にくらべやや低調である。和歌山・奈良・京都からのご出席があるのに地元の大阪人がもう少し熱意を示めてほしいものだ。

まず野村太茂津氏の柳話から幕があく。テーマは「出合い」である。核と核との出合いは、ボタンを早く押した方が勝つという怖しいがある。氏が戦線を駆けまわっていたころは狙いを定めても命中しない弾丸が今日の核ともなればどこからでもボタン一つで正確に命中するという。氏は云う「この核やわけの分からぬ川柳には出合いたくない」が、自分が路郎先生に出会ったことは最高のようこびだった。巧くまず語る氏の雰囲気会場は溶けこんでいく。話術のボタンが聴衆の胸に命中させたかのよう。

今月の月間賞杯は宮西弥生さんに輝いた。

受付―敏・岳人・与呂志

(進行―西田柳宏子・記録―高杉鬼遊)

出席―岳人・一三夫・敏・与呂志・勝美・雅風・千代三・太茂津・きみ・滋雀・重人・紫香・潮花・孝江・水客・育園・綾珠・みずは・あいき・頂留子・右近・千万子・瓢太・規不風・桐下・度・健司・花梢・天笑・三十四・萬的・柳仙・柳伸・夕花・栗・柳宏子・善紫・形水・英壬子・たつお・糸葉・生々庵・英子・鬼遊・雀踊子・鎮彦・寿子・好郎・小松園・山久・文二郎・文秋・君子・洋敏・憲祐・弥生・涼一・酔々・翠光・凡九郎・葉子。

席題「入れ知恵」 山本桐下選

入れ知恵へ少し意地悪したくなる
入れ知恵を左右するのは私です
入れ知恵の裏には深い罠が待つ
入れ知恵をせせら笑っているオウム
入れ知恵へヒントが狂う射程距離
入れ知恵に幼女おませ口をきく
知性派として入れ知恵に眼をきく
入れ知恵の言い訳どこでばれてくる
入れ知恵にあとの言葉が続かない
入れ知恵はこの程度かと安堵
入れ知恵をされた女がビルを建て
面接の子へ家中のアドバイス
入れ知恵をして揉めさるお節介
入れ知恵の母の言葉が光ってる
入れ知恵の男に言いが舌がある
チヨボチヨボが寄つて入れ知恵まよら
入れ知恵がチラホラ見える話し合い

三十四 鎮彦 涼一 育園 雀踊子 夕花 水客 綾珠 勝美 庸佑 規不風 たつお みずは 弥生 雀踊子 柳宏子 敏

友情のたまっておれぬ入れ知恵よ
入れ知恵がこちらで欲しい手の詰まり
弁護士の入れ知恵らしい黙秘権
入れ知恵をしてく補聴器知らぬ顔
入れ知恵は聞くだけにする仏さる
こまでは入れ知恵と言つ汗が出る
入れ知恵をしりたりされたり夫婦です
傷のつく入れ知恵があり貝になる
入れ知恵をとてまじめに聞いてやる
追いつめられると入れ知恵はけて来る
入れ知恵に暫く耳の鳴り止まず
神様の入れ知恵は通を外すなよ
左から右へ入れ知恵はめり抜け
踏切の向うに入れ知恵した男
入れ知恵が巧みに攻める泣きどころ
こめかみがピクリ入れ知恵効いている
素人の知恵も庭師はこえにして
入れ知恵も善意ばかりの蟻の町

席題「手ごころ」 那須鎮彦選

じいちゃんに勝った勝ったと指角力
手ごころをすこししてある愛のムチ
手ごころが裏目になった日の失意
プロの辞書手ごころと言つ文字はない
育つ子に手ごころをする腕すもつ
手ごころの中で辛抱さくらされ
見込みあるから手ごころを加えない
手ごころもとのへんまでか象の鞭
手ごころを信じて落ちた落とす穴
手ごころがすぎたと思つ虫のがね
手ごころをすると相手へツキ回わる

きみ 夕花 弥生 君子 重人 寿子 文秋 桐下 栗 形水

鎮彦 憲祐 たつ美 乙女 天笑 翠光 夕花 天笑 度 瓢太 糸葉 柳宏子 美乙女 酔々 庸佑 太茂津 萬的 桐下

美しいナース手ごろせぬ注射

手ごろのこんなところに罫がある

手ごろがほしくて尻尾ふつている

手ごろを頼む裏口開けてある

事務所へエプロン掛けの妻をやり

手ごろは人の弱さをみせている

手心を見抜いた女のさりげなし

正直なレンズで手ごろなどしない

手ごろのムチが愛馬の氣に入らず

手ごろを加えてくれてこれかいな

父のない子へ先生の甘い点

手ごろを秘めてソロバン珠おどる

手ごろが欲しい外科医のビンセット

神話にも手ごろ加えた跡がある

風少し吹いて手ごろ考える

札束のかさだけ手ごろ考える

手ごろはぜつたいしないカメラアイ

兼題「謎」

香川 醉々選

謎謎のようだが実は口説いてる

謎解けて何んと他愛のない話

謎ですぬ私に私位かされる

謎の明細書で不遜なものを貰う

を掛けて男は謎を解く

黒い謎解けて主役が消えている

どんくさい男に謎は解けますか

謎めく女は若く見えてくる

なぞなぞに輝いてくる子の瞳

金持の謎がわからぬ蟻の汗

謎かけて見ても通じぬ鈍な奴

規不風

一三天

雀踊子

糸葉

雀踊子

鬼遊

勝美

与呂志

英千子

涼一

柳宏子

たつお

千万子

花梢

醉々

岳人

度

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

鎮彦

くもの巢の謎を追つてる小半時

解けぬ謎追つて人生走馬灯

終列車謎の女が隅に乗る

ベルシヤ猫ママのきれいな謎を知る

謎多い女ごろに疲れだし

謎一つ解けないままに風が吹く

引金がかつても引けて謎がない

謎かけて通じるような女でなし

謎解きに生き甲斐を持つ考古学

謎々で孫に結構いたぶられ

手鏡に写る時計が謎を解く

謎解けた時は結婚してました

謎かけた女の知恵を笑つとく

神の国卑弥呼は謎のままがよい

マリモ浮く謎は神だけ知っている

謎のある女にされて美しい

もひとりの私が謎の中にいる

致命傷になるかも知れぬ謎を解く

古代史の謎へ飛鳥は明る過ぎ

謎秘めた白磁の壺が鈍びかかる

兼題「箱」

児島 与呂志選

二重底ですと箱には刷つてない

それなりの箱におさまる御進物

下駄箱の隅に一足祖母の下駄

貯金箱入れるたんびに振つてみる

箱積んで女は苦勞しまい込む

俵せな夢を詰めてるオモチャ箱

玉手箱いそいであけるものでなし

針箱に女系の重味詰まってる

銷知らぬ腕の大功の道具箱

勝美

凡九郎

涼一

千代三

夕花

岳人

水客

庸佑

文秋

綾珠

鎮彦

綾珠

小松園

滋雀

千代三

水客

水客

君子

水客

萬的

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

醉々

ダンボール故郷の味をつめてくる

飛び箱を飛べぬ少年虫を飼つ

大きい箱選んで金持狂い出す

捨てられた小猫の箱がゆれている

折箱をもう一票背負われ

ビルという箱に詰められ生きている

重箱に母の匂いと四季の味

自閉症陽の当らない箱を持つ

神様に匂あり養銭箱の音

人形のため息を聞くおもちゃ箱

メルヘンの世界が生まれるおもちゃ箱

餌に迷い王者は箱でもう吼えぬ

押入れの隅に不気味な箱がある

箱書になつて気楽に筆がのび

宝箱抱く孫寝入った涙拭く

兼題「青」

若柳潮花選

独房の窓にも青い空が見え

ぎんなんのやさしい青にだまされる

八月のヒロシマで青い目が怯え

青シソの香りに引かれ寿司を巻く

青いままバナナは長い旅をする

ひや奴浴衣が好きな青畳

訣れ話へうどんの窓が青すぎる

峠まで行けば青空へときどきそう

夏空の青さに屋根で息をつく

水たまりにうつす青さが空にある

人妻の懐深く青い海

念入りに研いだ青さに嘘がある

まだ青い角あり手加減して叩く

青色に変えて税務署恐がらす

三十四

たつお

弥生

涼一

洋敏

一三夫

美乙女

水客

醉々

糸葉

君子

雅風

涼一

小松園

与呂志

与呂志

好一郎

涼一

きみ

美乙女

たつお

千代三

鬼遊

三十四

健司

雀踊子

糸葉

寿子

鎮彦

英子

善人は死なす青空のある限り
藍の青年期を積んだ手に染まる
紫陽花の青は正直者歎ます
凡人の心は青くすてくる

左遷地の海の青さが救われる
奇型魚に海の青さが戻らない
青空に描こうとすれば嘘になる
青畳ローンをふっと忘れさす
青空を四角に分けるビルの窓
青信号待てず大人だけ渡り

摩周湖の深い青には嘘がない
小学唱歌の海は青青澄んでいた
入選の絵に炎えている青い竹
実らせてやりたい想いの青い夢
青く澄む子の目に合うてうろたえる
静脈も青く夢二の描く女

青梅が匂うと亡母が生き返る
海の青流水にしばらく負けておく
青い火で螢は愛をたしかめる

兼題「各駅停車」 西尾

扇風器各駅停車は持っていた
一つずつ真面目に停る汽車に乗る
各停も退屈しない話好き
検札が来て各停にのり替える
旧婚の旅各停が似合うだろ
各停で恩師訪ねる地図を買
臆病な恋は各駅停車かも
朱印帳持ち各停に乗り替える
各停の町でひっそり妻になる
各停のだれも乗らない昼下がり

憲祐 紫香 柳彦 鎮彦 雀踊子 滋雀 凉一 憲祐 庸佑 萬馬 静風 規不風 頂留子 君乙女 凉一 水客 潮花 葉選 白李 鬼遊 喜風 天笑 滋雀 糸三 糸葉 形水 糸葉 勝美

各停のそれも朝晩だけの駅
各停の旅に廻り椅子はない
各停で行かねばならぬ父の墓
各停の母子鉄道唱歌を唄う
各停が着くまでバスは動かない
各停の窓のみどりに救われる
各停に馴れ特急に乗る不安
最果てのひと駅ごとに海荒れる
今日からは美人と出合う各停で
各駅停車夕陽のきれいな街走る
各駅でひと駅ごとに目をさまし
各停しから止まらぬ駅にある穴場
各停の旅野ぼとけに会いにゆく
マイペース各駅停車が性に合い
各停で話のつづきするつもり
冗談に各駅停車乗せられる
駅弁の飯つぶ鈍行残さない
太陽が各駅停車にある日記
各停の笑い古里まで続き
各駅停車しばらく稲の穂が匂う
各駅停車蠅も気軽に乗ってくる
各駅停車行商人とうまが合い
各駅停車かたくなに本読んでいる
本が読みたくて各停に乗り替える
各停の町に遊女の小さい墓
各駅停車風の匂いがまた変り
各停へ雷雲がついてくる
各停の朝は花の荷と出会う
各停の窓にゆつくり秋の雲

柳宏子 三十四 醉々 桐下 凉一 たつお 柳宏子 水客 弥生 洋敏 花梢 文秋 醉子 君園 小松園 育園 規不風 文平 凉馬 静馬 萬的 水客 たつお 鬼遊 夕花 憲祐 弥生 葉

(河井庸佑・整理)

第十四回 東大阪市文化祭参加

第八回 川柳大会

日時 昭和五十五年十月十日(祭日)
正午開場 出句〆切一時半

会場 東大阪市立中央公民館 二階
視聴覚教室(近鉄永和駅すぐ南
市民会館内)

講演 「川柳よもやま話」
番傘川柳本社・副幹事長 龜山恭太氏

兼題及選者 「手」 天根夢草選
「部屋」 上田祐三選
「なさけ」 高杉鬼遊選
「寛」 永田帆船選
「期待」 野村太茂津選
「弾む」 福島郁三選
「女神」 森中恵美子選
(五十音順)

席題 一題(当日発表) 竹中綾珠選
出句 兼、席題共各二句以内。
出句は出席者に限る

賞 各題優秀句に東大阪市長賞その
他

賞費 五百円也(呈・大会句報)
会費 (第二部)

懇親会 貳千円也(会場で受付)
主催・東大阪市文化連盟
後援・東大阪市・東大阪市教育委員会

老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳塔まつえ句会

恒松 町紅報

通り道びつくり箱をしかけとく

興亡の歴史に民の血は流れ

民宿で大鯛釣った夢を見る

出雲路の人情民話の中で生き

ふる里を捨てて民話にささやかれ

贈賄が盛られた皿に民の怒気

抽出しの奥に入れてる玉手箱

折紙の箱に童女は夢広げ

本能を奪う愛鳥という果箱

従えば火を噴く山を胸に抱き

従う子さかぬ子も山を胸に抱き

マツチから三軒歩いたことを知り

落ちていてみれば死角でない死角

七人の敵は死角へ坐らせず

ふと箱を抜けて出て見たい藤娘

むらくも句会

藤井

汗さつと引いて絶景に立つ恐さ

美しい女をカメラに滴しぶき

滴たれる岩を庇に滝見茶屋

健康の今日の幸せ汗に盛る

土まみれ汗を流して来た夕陽

三和 軒太楼 三つこ みる 栄 夢 愚童 雪美 鶴丸 舞美子 舞吉 快哉 遇児 孤呂二 登美也 明朗報 正朗 芳子 孝華 秀子

子にかけの夢へ耐え抜く母の汗
別れ来て旅路の心あらう滝
滝に身を打たれて邪心払いのけ
伝説を語りかけてる滝伝け
金星をあげた力士の玉の汗
ジーンパンが河原に踊る滝祭
霧深くこ音聞いただけの滝
谷川の水造園の滝となる
夏を呼ぶ滝のしぶきが涼しそ
早起きの姑に気にせず朝寝坊
雑念もしばし忘れる滝しぶき
滝壺に捨てて来ました痛む恋
太陽にわしの早起き笑われる
早起きを誘う鐘の音霧に乗る
早起きの花のしづくへ仏間の灯
信心は滝のしぶきの中に立ち

大田川柳会

藤田軒太楼報

山茶摘む老へ五月の陽が注ぐ
寄宿にも慣れた五月の子の便り
五月の陽さやかに山の息使い
温泉の宿から新婚第一報
温泉の街を彩どる宿浴衣
温泉の湯気に旅情の友が出来
温泉で弱い男が羽根のばす
いつの間に若葉になった薫りする
湯の薫り想い残してパスの中
薫風につけて噂さの女くる
花嫁の薫りを包む貸衣裳
山百合のただ一本が匂う谷
風薫る広野は若人達のもの
性悲し亡夫へ届かぬ愚痴を云う

個性ある決め手が受けた勝名乗
新茶摘む缺さばきに風薫る
庭石に父のこり性据えてあり
性格の不一致でしたと荷が戻る
強烈な性の持ち主離婚歴
のびのびと母に甘える里帰り
制服がびつたり身につく五月晴
にた川柳会
西村
酪農の見学茶代りに出る牛乳
鮎哀れその習性を利用され
童心に夢あり果箱に離かえる
ぜいたくになり過ぎ母の味忘れ
もう一度今日を振り向く日記帳
片隅の主張は闇にもみ消され
過疎守る老の二人の心意気
笹餅に義歯が気になる味気なさ
ものみん水臭くなる日免死ぬ
十年振りちつとも変りませんは嘘
忘れたいことありあくせう草むしり
ほのぼのと色香を包む江戸ゆかた
順番がきたのに歌詞が浮かばない
口答える娘みなおす胸の線
負け牛の涙に島の陽が沈む
紫を着るヒロインにある自信
どくだみの花の白さよ梅雨最中
耐える事多き愛なり雷雨聞く
わかあゆ川柳会
小砂
減反の田圃に永張りつめて
手ごたえがきて素直な子に育ち
理想境求めて稚鮎さかのぼり
押し花が今なお薫る青春譜

軒太楼 多賀子 夢酔 秀子 舞仙 独仙 鉄花人 独仙 軒太楼 雪子 雪みえ 可保留 静代 孤雷軒 龜甲 多賀子 夢酔 雄々 寿美子 弘朗 緑之助 早苗 白汀報 敏明 鉦江 輝水

自慢の歯水ガリガリ処分する
遠き子に薫る花びら入れてやり
氷山の一角わが家の笑い声
床の間で大きくびとけるママの琴
スズランの薫りとどける飛行雲
雨しとど峰寺を洗う音となる

川柳たけはら 森井 舊居報

鬼の目に涙人前はばからぬ
姑さんの言葉を探す新茶炒る
自戒する心に鬼が出てきそう
小さな夢小さく抱いてすみれ咲く
ゆうしょうのしるし私の宝物
小さくとも大きく泳げ鯉のぼり
割込んで来た中年の赤い服
墨彩に燃える心をとめおく
見上げれば夫ふりむけば子等 春
みどりの中で仁王立ちする一歳よ
栄転へ妻と子供は置いてかれ
妻の影の影濃うくみす夕日
草を刈る妻の無口へ夕焼ける
忍従はこれまで藤が鉢を割る
雨のグラウンドを見つめる青春
露地に咲く花には嘘も見栄もない
たそがれて男それぞれ苦を背負う
傷心へ負けず心に花を活け
藤棚の恋藤色の風が抜け
幸せをためよう夢の貯金箱
いちぬけてにぬけて無職ひるのさけ

菜の花句会

僕の傘だけが乾いている遅刻
ずぶ濡れにしたとこで止む通り雨

高杉

鬼遊報

清夢 清泉 芳枝 白汀 静水 静火 文晴 小直美 寛子 純舟 靖子 笑子 蘭幸 節夫 鬼朽 青居 中二 秀夫 かつ子 英詩 小五 紀 かつ子 度 鬼遊報 みずは

浮世絵の一枚下のしやれこうべ
立ち読みの知識で一つばしな口をきく
抜け穴の向うで笑っている狐
当選をすれば舌の根乾き出し
燈台を守って誇り持つ暮し
離婚歴あるので聖書読んでいる
燈台の白さが憎くなるカモメ
穴場から穴場へ男の旅終る
浮世絵も玄關脇は住みにくい
退屈で練炭の穴つづいてる
燈台へ月見草の道恋の道
差し向い女はすでに乾き切り
すれすれに脱いで浮世絵くずれない
墓の穴ぐらいはすく大きめに
燈台に育って星の名を覚え
寡婦の血は涙が涸れてから乾く
大散歩穴を掘れとはまだ泣かぬ
豆の木を登るジャックが濡れる雨

川柳わかやま 堀端

十善を積んで極楽疑わず
打たれても杭は飛躍の夢捨てず
残り糸集めて母は虹を編む
ゴキブリよ昔多彩な死のありき
双方よりお委せしますと佳き日柄
健やかに育って嘘のない笑い
飛躍するあしたへ助走溜めている
菊花展多彩の中の白が浮え
飛躍した過去を辿れば母が居る
飛躍する女軌跡を覗かせず
その中の一人集めるための会
ここからは貴方に委せ従いてゆく

雀踊子 頂留子 柳宏子 鶴声 豊人 岳人 柳伸 糸葉 柳美 秋美 小松園 弥生 鬼遊 夕花 幸生 昭子 醉々 三男報 勇太 正博 和子 道夫 紀美女 幸 与史 三千代 三男 佐代子 千寿子 寿子

委すとは云わず合鍵渡される
一ときも惜しむ飛躍のない牛歩
一本の綱引く蟻になる集い
集印帖ここから先は代理人
空想の絵図に多彩な夢を盛る
飛躍する翼が欲しい松葉杖
金は駄目ほかのことなら委しとき
十萬億士必ず行けるヨ保証する

どんぐり川柳会 谷垣 史好報

一波乱前ふれにする黙秘権
あれほどの波乱 香煙揺れただけ
芋畑子らのかん声空へ飛ぶ
大臣が死んでも波乱おこらない
カステラを切ると波乱は消えてゆく
反戦歌波乱の中の少女の死
日本人の心で食べた芋のつる
芋ばうで母喜こぼす箸をとり
大和三山芋粥の味うれしがり
仏さき嫌いなものを供えられ
こつそりの文は無限の夢を抱き
火種もつ女は芋を食いたがる
石焼きを千円札で買う時代
芋掘りの子が只今と泥だらけ
唐芋で命継いだこともある
嫁く前夜父の波乱の過去を聞く
うっかりと打った合鍵から波乱
波乱にはくじけぬ娘の赤い髪
嫌われて俺も一人前になり
戦国の波乱悲恋をくり返し
雲西へ飛ぶは波乱が起きたのか

オーエスケ川柳会

大坂 形水報 蕉風 美乙女 柳伸 柳江 凡子 勝美 儀一 真砂 万里 雅風 好郎 千代三 憲祐 醉々 岳人 鬼遊 サヨ 弥生 一二三 凡九郎 天彦 公子 すみ子 武雄 裕太 武美 女

友達が出来て明るい子にvari
残り戎の笹をバンダにプレセント
パンダ見る子供は笑顔親は汗
母さんは友達の子供だとすぐに言う
から振りの出来ぬ場面に立向い
バンダ熱冷えたボスターひげを書き
握手した友のその手に苦勞知り
スナックに一人でいると電話くる
空振りのついでに蜘蛛の巣払って
窓ガラスにやな思ひ出くもり出し
友達が女でみだしなみvari
人工授精とはバンダも当惑し
空振りも掛布スマイル忘れな
日の沈む方へバンダは背のびする
空振りが続く霧はまだ深し
空振りのポーズに空が青すぎる
寝て食ってバンダ充分稼いでる
空振りになろうと夢は買っておく
剝製のランランの目が濡れている
空振りをした空間が広すぎる
野良犬を友達にして独りっ子
から振りを社長笑っただけのこと
空振りをさせる魔球を持つ女

和歌山七面合同句会

中筋 三幸報

亜也子 富田 キヤニオン 芭奈奈 百合子 美佐子 一扇 米蔵 安竹 信楽 博泉 度 亜成 一念 千夢 聖地 雅洋 弥生 入水 好郎 品子 勇次 文厚 智水庵 良三

風呂上りビール一杯極楽で
名人と言われて背にある孤独
みたま我れ生けるしるしのビール党
ビアガーデン男おんなの声となる
ビール抜く手付きはバーのみ競う
世が変り娘とビールのママらしい
一芸に秀で物価高知らず
名人と持て囃されてマイク持ち
名人と言われ養子がまともらず
仲よしの歩けば共に影揃う
ゴキブリの末期を見せるコマリヤル
空を画く少年の顔も空となる
合掌に呼吸ととのえ古稀の梅雨
草ちぎる片手寂しく愛しくて
くじけたる心に達磨にらんでる
達磨大師不動の姿も慕い
落選を達磨片目で泣いてくれ
当選のカメラ見あきたダルマの目
金で得た目玉案じている達磨
達磨今日大きな欠伸して見たし
反抗期達磨になって閉じこもる
坐折した男へ贈る達磨買う
浦島の亀のお歳はもういくつ
泉水の亀は万年等生きず
いちど空飛んでみたいと亀の夢
親亀の背で子亀のていかい夢
うっかりと亀車道まで来て思案顔
川筋の笑店のひとつ綿菓子屋
亀さんに夜われそうな古稀祝う
亀ある日甲羅を脱いだ夢を見る

世津 淳子 秀雄 光治 隆恵 ひさ子 五月 啓子 三幸 武助報 向井 善吉 さよ子 漁波 道夫 波津 時雄 希久志 富志子 こう 武助 みずほ ひで 信夫 辰雄 克幸 加仙 幸代 民治郎 操子 白光子

川柳化粧槽

植村客遊子報

田植機へ亀首を出す隙がない
ローカル線欠伸がうつる終列車
古傷にじんわり触れる懐ろ手
男です哀しき事も日記せず
お世辞でもいいから美人にしてほしい
もう泣かぬ涙静かに拭いてやる
のれん分け娘もつけてやると云う
読みのきく政治家サツと金つかむ
その時は云わず飲んでから怒り
口惜しさを静かに母のひぎに捨て
友達を無くししない為妥協する
夏負けを氣にして母の電話あり
絹すれの音へ呼吸を整える

城北川柳会

川口 弘生報 客遊子

佳句地10選 (前月号から)

嘉数千代香選

両方の意地が線路を歩かせる
無人駅誰のこころか四季の花
灯を消せば灯を恋い点せば闇を恋い
勝ち負けは抜きで見給え空の青
定年という残酷な列がある
花影の花はひそかに息をする
地獄絵をじつと見つめている鴉
響かない太鼓を叩く凡夫婦
青紫蘇の味さわやかな人と飲む
定価表の通りに善人よう売らず

一二三 千代 不朽 菁居 天樹 鬼遊 鬼遊 眞弓 紅月 小松園

やりくりでもめてるひまもない生活
内職のやりくり物価に追いつけず
やりくりがつかずマタムがまたかわり
やりくりに疲れ後れ毛そつと撫で
やりくりで女手とは何ぞと妻と揉め
やりくりで女房いそいそ旅に出る
やりくりのつかぬ話で夫婦もめ
やりくりの貯金で空の旅もする
やりくりの秘訣を母に聞きに行く
やりくりは主婦のパートで稼ぐのみ
やりくりで晴衣つくって子に着せる
やりくり算段教える老母が傍に居る
やりくりの苦勞を娘も知っている
物価高やりくりぐらいて追いつかず
やりくりも愛すればこそ苦にならず
やりくりの夕食明日は給料日
入道雲ソフトクリーム生ビール
子供御輿父のカメラが追いかける
勝山双葉川柳句令 河野 君子報

きくみ テルミ ますえ 英王子 右近 喜代子 左春 としよ ふみ 炬斉 捷一 美弘 午郎 千子 道子 満津子 三十四 美佐子 キミエ いくの 千里 花岡千世子 静香 喜代美 田鶴子 千恵 洋子 吉村千世子 静子

玄関を入れれば亭主の顔となる
夫待つ玄関に灯をともし
玄関を出る時男身構える
玄関で帰した人に悔があり
玄関でその家の貌を見てしまつ
駒つなぎ川柳会(大阪市)里 小路報
辞めたとも辞めさせられたとも聞く退社
ジパンで朝のくらしのある舞子
筋書の一章にある辻うらない
筋書の通りに運ぶのも不気味
筋書なんかにいるもんかい仲間
筋書のロケに灯がつく法善寺
筋書の夢を追つてるドヤの窓
流れ星とんで筋書ききなおす
長電話でねばる女の妬心かも
眼鏡光つてねばる話になつてくる
ねばるだけねばり勞資とも疲れ
ねばる児にかいた財布の根くらべ
妨害は承知裸で立つ候補
そこがあの人ねばりかたにも格があり
魂胆があつて看板までねばり
車間距離バキユームカーにうずめられ
妨害が一層闊志湧き立たせ
妨害の裏に女の軽い口
神様のお喋り妨害出来ませぬ
妨害をしてると当人気がつかず
南海電鉄川柳会(大阪市)辻 主水報

英子 節子 智慧子 智子 君子 薰風 宏子 鎮彦 綾珠 恒明 育園 柳宏子 桐下 規不風 美代 千代三 茂路 小松園 凡九郎 柳伸 柳柚 雀踊子 醉々 小松園 主水報 小松園 宏子 雅風 千万子

縁起でもない話の向きを変え
縁起もの左で買った宝くじ
茶柱が立つて月給上りそつ
古びても捨てるに惜しい縁起物
縁起ものやつぱりそつと買っている
縁起もののお蔭と実力みてくれず
五円貨の賽銭へかついでいる縁起
菖蒲湯につかり厄除けしたつもり
縁起ものかついだわりにめもふかず
我が事になれば信する縁起もの
縁起ものタルマ片目を持つばかり
軍歌イコル私には鎮魂歌
アゴ出ても軍歌で足が軽くなり
戦友と吞めば次々出る軍歌
軍歌には戦争と言う悔がある
後の世は軍歌無き世と祈るのみ
勇ましい軍歌の蔭に悲劇あり
人生は悪役のみで終らない
世の中の悪役みんな殺さない
悪役の素顔紳士で好男子
南大阪川柳会 中川 滋雀報

勝美 昭月 千代三 儀一 正流 圭水 維久子 綾女 泉秋 信江 とし子 善紫 東雲 与一 いづ枝 さゆり 清水 朝子 白梅 英子 儀一 鎮彦 美乙女 文秋 恒明 頂留子 好郎 勝美

角とれてきた晩年のいい笑顔

晩年が寂しい父で赤を着る

野の井戸の蛙で空がまんまるい

猫八の喉から蛙の夢を聞く

浮き草を舟にしている青蛙

雑用の無い日は神経病んでいる

妻病んで雑用多い家事をしり

幹事とは名のみ雑用係です

人生模様の乱れを繕う祈りかな

人間模様自分の彩をやはり塗る

川柳大阪

西岡

半世紀坂道表は杖となる

鯉のぼりのびのび生きよ子に願う

入学式母の絵羽織ビッカビカ

刺のある言葉へ本性見せはじめ

花便りカメラはじつとして居れず

背伸びする入道雲に負けまいと

背伸びした腰がきれいな虹を見る

女抱く日もなく法衣たたまる

水のない川は怒りを溜めている

万円札どこでけがしたセロテープ

住民の力公害から守り

日日好日定年退屈にする背伸び

好物を舐めてる母の背が温い

かくしゃくとして六十の好奇心

日日好日達者取得の父で居る

好物を買い冷戦浴けはじめ

紫が似合う女でよく稼ぎ

雨あがり紫陽花くつきり顔あげる

紫をべたべた菖蒲園描く

京都塔の会

松川

千代三

静香

滋祐

藻雀

形水

久子

柳宏子

善紫

君子

凡九郎

喜洗

醉花

君枝

喜醉

秀峰

比呂志

与呂志

本蔭棒

天樹

雅巢

天平

六龍子

笑風

真佐志

洛醉

道子

希久志

三十四

九平

杜的報

春の顔出して土筆は摘みとられ

雨上り手持ぶさたの雨蛙

大学の近くでうまいコービー店

道祖神へ思わず挨拶こんなには

貝がらの涙が少女のみぞおちに

水飴をなめ峠を越した聴診器

千歳飴カメラを意識した笑顔

小飴の硬さへ割箸負けそうて

桜から若葉の姿大原町

若葉から若葉へ気持よく疲れ

濃くうすく若葉動かす風があり

眼に若葉タケノこめしの箸を割り

この島の弁天さんから朝が明け

老妻が弁天さんに見えた頃

紅一点弁天さまの自己嫌悪

弁財天岩屋の奥で濡れ給う

東大阪川柳同好会

東大出と言うハンサムの陣容で

算盤の珠で妥協を強いられる

卑屈ではないと妥協に云い聞かせ

独立の手鍋ぶつとぶつ煮えている

陣容にスパイが一人混っている

お山の大将になれそうもない妥協

ライバルも妥協の旗を持っている

真夜中に不安先立つ電話ベル

だしぬけにバトカーが出るハイウエー

だしぬけにエンジンからぬ隠し芸

だしぬけに友達は酒を提げ

だしぬけに言われ返事はうわの空

花代子 孝江 紫香 美穂 明代 いさむ 白溪子 芳子 善紫 飛鳥 杜的 潮花 佳丹子 白李 水客 求芽 三十四 慶三 文秋 弘一郎 喜明 恒美 勝美 益孝 柳伸 弥山人 綾女 誠一 良京 千代三

第32回 西日本川柳大会

とき 昭和55年9月14日(日)

午前8時半開場

ところ

岡山県久米郡久米南町下弓削

久米南町中央公民館

兼題

シンボル・影・計算・手帳・耳・見る・

選者

去来川巨城(明石)、西尾 栞八尾、小松原爽介(神戸)、河村日満(鳥取)、寺尾俊平(岡山)、片山巷雨(久米南)

席題

2題当日発表(12時しめ切り)

投句

各題2句以内、タテ22cm、ヨコ4cmの句箋に1句ずつ明記、裏面に雅号を書き、9月5日まで

に弓削川柳社宛(出席者は当日11時まで受付)

出席1500円(発表誌、記念品、昼食呈)

投句 七〇〇円(発表誌呈)

▼大阪方面から出席の方へー9月13日1時新大阪発/岡山着2時・夢2の生家見学/岡山泊総費一万八千円/翌14日大会出席/窓口・旅人。

主催 弓削川柳社

バトカーのだしぬけひれつだと思つ

だしぬけに憎い男の便りくる

だしぬけへ脳波が右往左往する

だしぬけの間違い電話に起される

川柳しんぐう

花鉄緑へすまぬ枝落とす

夢を画く緑が足りぬ都会の子

緑には不自由しないが過疎の村

熱心が過ぎて踏み出す勇み足

愛憎もありました嫁の熱いお茶

風の夜は古いランパが熱くなる

強敵の会釈が熱い風となる

女の昂ぶりやがて微熱となつてくる

情熱をろこつに出すと敵がいる

喪服着て女に光るものは無し

灯台の光りは難船救われず

露地裏のうすい光の温かみ

ロソクの中にも父の名を出され

七光りここでも父の名を出され

少年の瞳に光る海がある

七光りなしでも子には子の光り

形身分け内輪で囲む小引出し

引き出しに妻の悩みがつめてある

開ける事ならぬ引き出し胸に秘む

急用があつたか引出しあいたまま

川柳ささやま

塩まいて恐い相手だと思ひ

塩味が気になりかけた診断書

塩なめて世間の恐さ思ひ知る

御機嫌のでんでん虫は角を出し

かたつむり今東光に喰われるぞ

度

湖風

鎮彦

柳宏子

大輪報

まさ子

十郎

溪水

勇太

道子

幸

登記夫

大輪

雀踊子

柳志

としよ

武雄

与史

冬花

はじむ

富子

利風

与呂志

弘生

澄孝

河原みの報

越山

文平

春峰

八陳

法齊

デンデン虫哀し幼い詩を抱く

良いかびが灘の銘酒を醸し出し

かび臭いでも金婚の枕華

持つて行け持つて行け下宿カビが生え

おふくろのヒントが生んだ今日の味

入れ智恵のヒント相手が先に読み

平凡にヒントもらはず日を過ごす

冗談を本気で女房ふくれてる

冗談もすっかり云えぬへんてこりん

苦虫が冗談云い出す程に酔い

三井ヶ丘川柳教室

一億円とこに飾るかウサギ小屋

約束を念押ししてから嫌われる

口下手な息子の優しい目を信じ

柳に蛙理想のまんま飛びつけず

収入の格差心に差をつける

傷つた鴉はケンケンして歩く

優しさを小出しに母となつてゆく

傷を持つ脛にゆつたり高給車

衣食住足らねば優しさなど要らぬ

風が優しく団地サイズの鯉のぼり

優しさの裏で女の意地が燃え

鮎食べにひなびた宿へ運ぶ足

雲一つ水田にありて薫風生きる

ここまでの椅子は約束されている

バラの香に優しい嘘が漂いぬ

約束が難行しそつて妻出番

思案顔爛の匂いにくすぐられ

底のないカバンへ公約みんな入れ

賽の目に合せた訳で無い生活

約束してから固まり出す気持

宗珠

素水

百合子

可住

静子

みのる

千代子

栄樹雄

久子

さかゑ

博泉報

隆子

満津子

勝美

柳歩

眉水

よしひろ

新之助

弘生

一善

博泉

博泉

洋茶

野生

一念

琴念

花世

一途

晴風

亜成

足腰へ優しい嫁の手が伸びる

鳥には鮎の清楚が美しい

瀬を上る鮎下る日は思ひうまい

吐き棄てた唾がわたしを見上げてる

約束の時間空気が甘くなる

鮎を釣る鮎の鮎の目が哀れ

愛国の志士に出会わぬパスを待つ

落ち鮎の里から届くおんなの詩

鮎料理だけは値切らぬ浪花っ子

指切りのつぶらな瞳は裏切れぬ

家計簿を閉じて優しい目に戻り

約束をするからいらいらしまんねで

鮎の骨男の骨も抜く仲居

虹川柳倶楽部

草取りの子等にすみれをのこさせる

皇族が出て一億の票集め

齢老えは文字の形も角がとれ

父の日はなくとも母の日の母強し

ああすれば良かつた知恵は後に出る

男前女性票で上積みし

麦飯を別のおかまで炊き

大海で小魚一匹針にかけ

はいはいと綺麗な返事味が無い

宰相の気持くむ気か自民圧勝

川柳後楽(岡山市)

井上柳五郎報

さいれい野言うても野心ちらつかせ

東大の野心を負わせたランドセル

定年が近く野心も先細り

いつまでも泳がされてるこの野心

限界に來ても野心はまだ捨てず

亜也子

亜鈍

右近

光夫

英千子

三千子

惠美子

英比古

度

柳宏子

小路

古方

薰風

新岡回天子報

勝一

義美

久仁於

一竿

素石

四郎

掬治

虹汀

回天子

哲郎

幽谷

幽谷

梁太

博友

秋月

罪つくる金と女がからみ合い
罪深い人どん欲に生きている
千の罪一つ消す日の暮参り
輪転機罪のニュースが又まわり
ロマンスが欲しくてみくじ引いて見る
大凶のみくじ信じぬことにする
寄り添うて明日に生きるみくじ引く
人相が似合う名刺の低姿勢
人相と手腕がどうもマツチせず
人相に前歴のかげにじませる
会うたびに見立てがちがう人相見
迷うて心みくじにゆれて居り
良心が逃がしてくれた小さい罪
川柳ウイロー社
前山

元一 青銅 胡風 鮫虎狼 恒洋 七面山 玉水 宏路 照路 柳五郎 定平 昌吾 久米雄 北海報 英海 風影 歌子 万里歩 紅溪 北海 公女 雪女 秀山 良子 カロ女 三石 昭子 拝山 蒼生 黄塵 曉舟

川柳高知 川竹 松風報
気まぐれに女心をもて遊び
何もかも気まぐれだった日の涙
山男雲の流れを見のがさず
カンバスに絵を画く如く化粧する
並木路に風快し五月晴
留守番に空の青さが憎らしい
散りきわの花でやさしい風を待つ
落人のルーツ誇りに千枚田
新聞のこら玉世相に生きてくる
罪ふかい女と見えぬ片エクボ
白百合川柳社(岡山県) 嘉数千代香報
海越えて人形平和の使者の旅
保護色に染めて夫の旗を振る
日和見が金で買われた旗を振る
石投げて波紋の行方問うてみる
敗けられぬ涙は拳で振り払う
主義一つ通して白旗など持たぬ
小形でも中味は他人に敗けられず
敗残兵眠れ祖国の無縁塚
現実には引かれおかめの泣き笑い
敗北の再起へ友の掌が温い
人情にからまれ引き時見失い
雑魚でよく雑魚には雑魚の旗がある
指人形マの小さな夢ひらく
感動の人形劇の中に溶け
子無し夫婦せめて人形との対話
妻よもう叛旗を降ろせ日と暮れる
旗巻いて置く場所もない七十路
主義のない男と旗も知っている
人形がふる里を着る紺緋

十考 長坊 一歩 克子 登舟 麗子 節子 菊野 松風 卓香 勝江 若恵 貴枝子 梨花 幸栄 京太郎 静佳 哲子 柳昇 弘子 万福人 佐加恵 寛山 照子 英子 真弓 千代香

文化祭参加

第30回 岸和田市民

川柳大会

日時 昭和55年10月19日(日曜)

十二時開場……十七時まで

会場 岸和田市民会館地下会議室

柳話 川柳塔社主幹 中島生々庵

兼題 「出発」 小出智子選

「下手」 藤岡花梢選

「邪魔」 田頭良子選

「王様」 高橋幸代選

「満腹」 林 春栄選

席題二題 垂井千寿子・高橋千万里選

呈賞 各題秀句 市長林ほか

締切 十四時(出句は出席者に限りま

す)

会費 五〇〇円(句集代)

〒596 岸和田市土生町一九八九一八

高橋操子内 岸和田川柳会

電 〇七二(四二)〇〇四九

募集

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
 水煙抄 (10句) 菊沢小松園選
 愛染帖 (3句) 橘高薫風選
 課題吟 (各題5句以内)
 「思い出」 佐伯越子選
 「浮き沈み」 神田秀峰選
 「起きる」 河村日満選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りです。
 ★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
 水煙抄 (10句) 菊沢小松園選
 愛染帖 (3句) 橘高薫風選
 課題吟 (各題5句以内)
 「泣きごと」 時末一灯選
 「札束」 林春栄選
 「北」 小西雄々選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。
 字は楷書で新かなづかいにしてください。

9月の常任理事会は4日5時から

定価 四百円 (送料29円)
 半年分 二千五百円 (送料共)
 一年分 四千八百円 (送料共)
 昭和五十五年八月二十五日発行
 昭和五十五年九月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
 編集兼 発行人 中島蓬太郎
 印刷所 藤原童心社
 〒542 発行所 川柳塔社
 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
 電話 大阪(三三三)一三九八五番
 振替口座 大阪・三三三六八番
 普通預金口座番号・一〇二七八三

本社川柳忌句会

日時 九月八日(月) 午後六時
 会場 金属会館
 南区鰻谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271・3935番
 柳話 黒川紫香
 (今月の出題・香川酔々)
 「前座」 高杉鬼遊選
 「反発」 神谷凡九郎選
 「信心」 岩本雀踊子選
 「棚」 大坂形水選

兼題 各題三句以内厳守
 席題 当日発表
 会費 二題 三百円
 ★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
 大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

11月の兼題 「有名税色」 「真家相元」 「無」

55年度 川柳塔社二賞発表句会
 日時 昭和55年10月7日(火) 六時から
 会場 金属会館
 兼表彰 柳話 中島生々庵
 路郎賞・川柳塔賞
 「枕」 橘高薫風選
 「じっくり」 菊沢小松園選
 「巻き返し」 川村好郎選
 「ゆとり」 西尾栞選
 (二題・当日発表)
 三百円 (懇親宴はいたしません)

主催 川柳塔社

・ペンペン草・

無題

★七月末から八月の中ごろまでの涼しさ、こんなにもしのぎよい夏は始めてである。避暑になど行ったことはないが、お金持ちには毎年このような涼しい所で暑さを避けているのだなと思うとちよつと羨ましい。九月号は原稿の寄りが遅そかったので昼寝の時間が楽しかった。しかし農作物が大変なんだらうと、大臣気取り

肉体疲労時のVB₁₂補給に——
アリナミンA

アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



で心配もする。

★柳誌「川柳文学」を毎月堀口堯人前主幹が送ってくださるのだが、毎号封筒の裏へ毛筆で何か書いてある。八月には「以前川柳人に段位制を採用しては?と書いた人がありました。現在川柳宗家何世とか自称している人があります。以下十九字は伏せ字にさせていただきます。」

★柳柳の段位制のことはば

▼葉子コーナー

▼虫の音がすだき、日一日と冴えわたる月。

▼「読書」「食欲」「美術」と秋の形容詞にはこと欠きません。

▼最近ナシ狩り、イモ掘りと生産地へ出向くレジャーがブームで、自然の恵みをみずから掘き取る時の欲びは忘れられませんか。生産に従事する人達の愛情と汗とが伝わってきます。

▼自然の中で働く人に時雨の降るような虫の合唱、どんな交響曲にも劣らぬ味わいをあたえてくれます。

くも聞いたことがある。誰

が段位をどうして決めるのか、こんなことは夢みたいな話だが、一度大家の座についたら落ちないといふのもへんなしきたりである。★初心にかえって「がお題目になつては困るとい

★堯人先生も初耳のことと思いますが、路郎先生が体調をくずし、「川柳雑誌」の将来を考えられ、先生に万一のことがあった場合、次期主幹の人道に頭を抱えられた一時期があった。

★「川柳雑誌」はあくまで続刊すること。このような遺言をばくは二度もうかがった。先生は堀口堯人氏に次期主幹を頼む。そう決めておられた。先生はよくに相談されたのだから、よくも遠慮なく申しあげた。

それは絶対反対。理由は水は水、油は油で、次期主幹は先生の門下から「または葎乃先生中心の合議制を強く主張した。」

望めない。剣花坊氏没後、

女丈夫といわれた井上信子氏でさえ手占った川柳経営である。女性主幹はダメだと断言されるのだ。(このことは一度書いたことがある)

★どうやら今月の後記、堯人先生が中心になるようだが先生はよくのことを「川柳文学」で二度はめてくださった。故大井正夫先生もよくを男にするためチャンスを与えてくださったが、ぼくはそれを他の人に譲ってしまつた。他社の人から可愛いがられるということ

はまことにありがたいこと

だと感謝している。堯人先生の話にもですが、先生はご自分の書いたものが誤植された場合ただの一度も訂正を申しこんだことがない。そうだが、よくもそうだが、ぼくの場合は「じゃま臭さがり」なのだ。「川柳」時代、はじめて月間賞杯を獲得したのに別の人に誤記されたので、訂正を申し込まなかった。訂正で、本のうえでは幻の月間賞となつてい

本誌の誤植訂正の予防線を張つてはいるのではない、誤植のときはご遠慮なくどうぞ。(不二田一三夫)

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

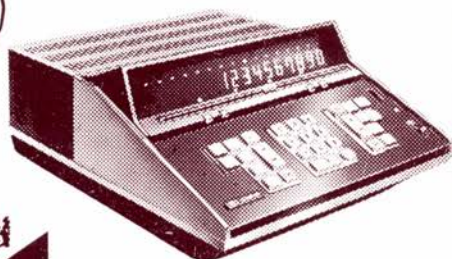
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



なんば橋本
大阪・四
高島屋



タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサブレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光ホテル **ホテルバシフィック**

政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門——うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 **鳴門**

政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに

観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄